

部活動だよ！
全員集合

『いろいろ』虹色
研究部の活動日

前置き

『いろいろ』とは

私立色彩高校を舞台に
虹色研究部を中心とした
色×青春×BLストーリーです

虹色研究部とは

虹色の要素である7色の色が名前に入ったメンバーが
だらだらとお菓子を食べたり
困っている級友を助けたり
巷の噂を調査したり
自分達の抱える問題に立ち向かったり
虹を作ってみたり
と多岐に渡る活動をする部です

メンバー

あかいいと
赤井唯人

明るくて人懐こい困ったちゃん

みょうがとうき
明駕橙輝

振り回される系苦労人

みょうがこうき
明駕黄輝

元気いっぱいのだじっ子

とよつなゆきは
豊緑由樹葉

何者をも包み込む虹研の母

はるせかい
青世權

差が激しいクール過ぎるイケメン

そめたあい
染田藍

ちゃっかり神秘の不思議ちゃん

あいかわしのん
愛川紫音

反面教師なアブナイ養護教諭

今回はある日の虹色研究部の部活風景を見ていただけるストーリーとなっています。
そして沢山のキャラクターが登場しますので、そこにも注目して頂けたらと思います。

それでは...

どうぞ『いろいろ』の世界を堪能して下さい！

部活動だよ！全員集合

勉強を乗り越えた後の部活動、帰宅、委員会活動と生徒達は思い思いの場所へと行き交い始めた時。

色彩高校本校舎四階の一角に位置する虹色研究部部室のドアノブを回わされる。

(.....ちっ。俺が一番乗りか...。)

しかし、ドアノブはほんの少し右に動いたところでガチッと鈍く音が響き回転を阻まれる。

オレンジ色の髪の生徒、^{みょうがとうき}明駕橙輝は顔を歪め舌打つ。

虹色研究部では学年関係なく最初に部室にやって来た者が部室の鍵を取りに行く決めてている。

橙輝は周りを見渡す。

^{こうき}(黄輝はまだ来てない、か...。)

黄輝とは橙輝の弟で一年D組所属の^{みょうがこうき}明駕黄輝の事だ。

色彩高校本校舎は一年生の教室は四階、二年生の教室は三階、三年生の教室は二階という構造になっている。

なので黄輝は直ぐにやって来るのだと思った。

(仕方ない...取りに行くか。)

数秒経ったところで諦めて自ら部室の鍵を取りに行く事にする。

虹色研究部部室の鍵は虹色研究部の顧問、養護教諭の^{あいかわしのん}愛川紫音の白衣のポケットにある。

なので先ず、橙輝はスマートフォンを制服の上着のポケットから取り出す。

慣れた手付きでボタンを押しロック画面をスライドしパスワードを入力する。

ホーム画面からトークアプリを開き、虹色研究部のグループから紫音の居場所を尋ねる。

『部室の鍵を取りに行くんですけど、愛川先生は何処にいるんですか？』

メッセージを打ち込み送信する。

すると、送信直後に返信が来る。

『今、屋上♪くれぐれも他の先生には言っちゃダメだよ？サボってるのバレちゃうからね（笑）』

紫音からの返信。

どうやら仕事から逃げられてご機嫌のようだ。

『分かりました。そっち行くまでそこにいて下さい。』

紫音が他の場所に移動する前に釘を刺し居場所を固定する。

紫音はよく仕事から逃げ出す為、居場所が定まらない。

その為闇雲に捜すと苦労する。以前苦労、一日の部活動の殆どを部室を開ける事に費やした事があった。

以前の苦労を教訓に部活のルールとして鍵を取りに行く際は紫音の居場所を尋ねる事としている。

橙輝はトークアプリを閉じ、ディスプレイの照明を落としてスマートフォンをポケットへと仕舞い、紫音の待つ屋上へと向かった。

ガチャ。屋上へ出る扉を開く。

「やっほ〜。元気してる...？」

気の抜けた声、紫色のウェーブがかかった髪、妖しい眼差しを向けて来る白衣の男性、愛川紫音が屋上のフェンスにもたれていた。

「愛川先生、部室の鍵ください。」

橙輝は紫音の元に行き、鍵を渡す様に言う。

「.....おっ、あったあった。」

紫音は白衣の両ポケットをガサガサと漁る。

「今日は左に入ってみたい.....はい、鍵。」

紫音は右耳に虹色のリボンを付けた愛らしい兎のキーホルダーのついた鍵を橙輝の手に乗せる。

「ありがとうございます。」

まさしくその瞬間だった。

「愛川先生、何処にいるんですか！今日までの書類があるんですよ！！」

晴天の下に怒号が響き渡る。

声は中庭を挟んで向こう側から発せられているようだ。

「うわっ.... ^{ちゃつね}茶常先生...相変わらず煩い.....。」

紫音は顔を顰める。

茶常先生と呼ばれた、向こう側で大声を張り上げて紫音に仕事をするように言っている男性、
^{ちゃつねぼうげん}茶常法厳は生徒指導の担当をしている。真面目で厳しい性格故に生徒から怖がられ鬱陶しく思

われている。

「...今日までの書類は流石に片付けて下さいよ、愛川先生。」

橙輝も法厳の言い分はもっともだと思う。

「ええ〜.....君までそんなこと言う？」

紫音は心底うんざりだと視線を橙輝に向ける。

「早く職員室へ戻って仕事をして下さい！！」

向こう側からフェンスを乗り越えんとする勢いで法厳は怒鳴る。

「『ええ〜.....』じゃないですよ、茶常先生の声、あのままじゃ直ぐに枯れちゃいますよ....。や
って下さい。」

橙輝は法厳を見兼ねて更に仕事に戻るように促す。

「.....しょうがない...かな。今日中のものはやろう....。」

フェンスにもたれた身体を起こす。

「わかったから...やるから、もうそんな大声出さなくていいよ一、茶常先生。」

紫音は反省の色が見えない気の抜けた声を少しだけ張って向こう側に伝える。

法厳は全く反省していない紫音に睨みながら屋上を後にした。

後を追うように橙輝は紫音と一緒に屋上を去り、橙輝は部室へ、紫音は職員室へと向かっていった。

橙輝が紫音から鍵を貰いに行き、部室に戻って来ると一人の男子生徒がスマートフォンを操作しながら壁に寄り掛かっていた。

「悪い。待たせたか、藍？」

「ううん、そうでもない。」

藍と呼ばれた男子生徒、^あ染田藍はさらさらとしたキューティクルの輝く首元程まである藍色の髪、前髪は目に入りそうな位の長さが神秘的な雰囲気を持つ。二年C組橙輝とは中学からの仲である。

「そう言えば...唯人はどうした？」

橙輝はこの場にはいない同じく昔からの付き合いである赤井唯人の事を尋ねる。

「ホームルーム終わってB組に行った時にはもうどっか行っちゃったみたい。」

「はあ...またか。しかもまた連絡もしないでか...。」

橙輝はドアノブに鍵を差し込み、いつもの事に溜息を吐く。

ガチャリと鍵が開き、部室の扉を開く。

橙輝と藍は部室に入り部屋の隅に鞆を置く。

部屋の中央にある七つの勉強机と椅子を二列に並べ一つを誕生日席として並べられた場所に橙輝と藍は並んで座った。

「...確かクラスの子が唯人は白い物体を探しに行ったって言ってた。」

藍は唐突に唯人と同じクラスの生徒に言われた事を思い出した。

「ああ...今朝からうちのクラスでも白い物体の噂で持ちきりだったな。如何にも唯人が首突っ込みそうな事なのに...見張っとけばよかった...くそっ.....。」

橙輝は後悔する。

唯人は何か起きれば首突っ込んでしまっており、毎度毎度のように橙輝は振り回されている。

「白い物体って何？」

藍は気になって橙輝に尋ねる。

「本当に知らないのか？結構話題になってたんだぞ？」

橙輝は本当なのかと逆に聞き返してしまう。

藍はこくりと首を縦にふる。

「今日だけで物が無くなったり、壊されたり、汚されたり、散らかされたりって被害が沢山あって、被害にあった連中の一部が犯人らしき奴を見たんだとよ。」

橙輝は簡潔に掻い摘んで話す。

「その犯人っていうのが白い物体ってわけ？」

藍は察して橙輝に核心を聞く。

「ああ、その通りだ。」

橙輝が頷いた時だ。

ガチャリ。

部室の扉が開いた。

「こんにちは。少し遅くなっちゃってごめんね。」

部室全体に穏やかで優しい声が響く。

緑色の髪で柔らかな雰囲気男子生徒が入って来た。

「こんにちは、^{とよつな}豊緑先輩。」

「こんにちは。」

橙輝と藍は部室にやってきた、二人にとっては一つ上の先輩である三年B組所属の^{とよつなゆきは}豊緑由樹葉に挨拶をする。

由樹葉は橙輝と藍の鞆の近くに自分の鞆を置き、勉強机の固まっている中央部分の後ろの棚や小さな冷蔵庫、電気ポットの置いてある方へ行く。

「橙輝君と藍君はいつものでいいかな？」

「いつもので。」

「はい...っていつもすいません。飲み物の準備くらい俺がやりますよ？」

ガタッと橙輝は慌てて席を立とうとする。

「いいの、いいの。座ってて、橙輝君。僕がしたいだけだから...ね？」

由樹葉は大丈夫だと言う。

「そっすか。じゃあ、お言葉に甘えます。いつもありがとうございます。」

橙輝は座り直す。

「橙輝、先輩の仕事とっちゃ駄目じゃん。したいって言ってんだから、して貰おうよ。」

藍はさも当然のように言う。

「阿呆か、先輩にはそういう事をさせるものじゃないんだよ...。」

橙輝は藍の頭をぺしっと叩く。

「ふふっ。相変わらず仲良いね。はい、橙輝君はオレンジジュース、藍君は烏龍茶ね。」

橙輝と藍が話をしている間に由樹葉は二人分の飲み物を冷蔵庫からペットボトルを出し、部室に置いてある其々のマイコップに注ぎ目の前に置いた。

「先輩、ありがとうございます。...そうだ、白い物体の話って知ってますか？」

橙輝は由樹葉にさっきまでの話を振る。

「ああ、その話ね。知ってるよ。クラスでもその話題で持ちきりだったんだ。^{みずしま}水島君が自分達サッカー部の後輩がグラウンドの隅にある石碑を壊したから鎮められていた霊が怒って今の騒動になってるんじゃないか...なんて言ってたよ。」

由樹葉はクラスでの出来事を思い出して話す。

「へえ...そんな面白い事になってたんだ。」

藍の瞳がキラキラと輝く。

藍はオカルトの類が好きだ。

橙輝は嫌な予感がした。

藍と唯人に振り回される少し先の未来が頭を過った。

ガチャリとまた部室の扉が開いた。

「すみません、遅くなりました！」

大きな声が響く。

鞆を皆と同じ場所に置きバタバタと席に着く。

「こんにちは、黄輝君。...あっ！そうだった、今日お菓子貰ったの忘れてた！今出すね。黄輝君は飲み物、いつものでいい？」

由樹葉は今日菓子を貰ったのを思い出し席を立ち準備をする。

「はい！」

黄輝、快活そうな黄色の短髪男子生徒は元気良く答える。

「ねえねえ、黄輝は白い物体って知ってる？」

藍はすかさず気になる事を聞く。

「もちろんです！なんたってウチのクラスのカーテンが引き千切られて、大騒動だったんですから！」

黄輝は得意気に語る。

「だからウチのクラスではUMAの仕業なんじゃないかって言う奴までいたんですよ！」

「霊にUMAか...面白いね。」

藍の言葉が弾んでいる。

楽しくて仕方がないようだ。

「はい、この間のお礼^{えんじがはら}に^{えんじがはら}漫研の臙脂ヶ原君がくれたんだ。」

由樹葉は大皿にこんもりと盛られたチョコレート菓子の赤い小袋の山を置いた。

「はい、黄輝君にはいつもの炭酸。」

シュワシュワとコップの中で浮き上がる気泡、黄色い色はレモン味の炭酸飲料は黄輝のお気に入りだ。

「あ、タブンカットだ。俺、好きなんすよ！」

弾んだ黄輝の声は嬉しそうな事がはっきりと伝わって来た。

「...唯人の奴、LIFEに既読もつけやがらない。」

橙輝は苛立ちを募らせていた。トークアプリから何度もメッセージを送っているが反応がない。

「捜して来ようか？」

藍が提案する。

「藍、お前も白い物体探しに行くつもりだろ？」

橙輝は今までの会話から察する。唯人を見つけて連れてくるどころか一緒になって何処かに行くに違いない。

「ばれた？」

「見え見えだっつーの。ったく、もう...。」

橙輝がどうしたものかと頭を抱えていた時だった。

「じゃあ、二人で捜しに行くのはどうかな？藍君は唯人君捜しのついでに白い物体も見れるかもだし、橙輝君がいれば二人が無茶をしないか見ていられるし。」

由樹葉が口を開き提案をした。

「なるほど。いいんじゃない。」

藍も納得し、橙輝を見つめる。

「いいですね。ありがとうございます、豊緑先輩。」

橙輝も名案だと思い、由樹葉に礼を言う。

「じゃあ、行ってきます。」

「行ってきます。」

橙輝と藍は部室出て唯人を捜しに行った。

唯人は三階にいた。

クラスのホームルームが終わった後直ぐに教室を出て、同じ二年B組でオカルト研究同好会所属のくさつあやめ草津菖蒲から中庭方面で白い物体を目撃したと聞き、中庭に向かった。

しかし、既に姿はなく空振りに終わってしまった。

ただ、中庭でダンスの練習をしていた、三年A組のみどりもえぎ美都里萌葱と三年B組のみどりあさぎ美都里浅葱という双子から再び校舎へ入っていく影を見たとき手掛かりを貰った。なので一階二階と順々に見て回っていき、三階にやってきた。

しかし、未だ美都里兄弟以降有力な手掛かりもない。

(うーん…。なかなか見つからないし、折角三階にいるんだし一旦B組に戻るか。)

唯人は帰りのホームルームが終わって直ぐに教室を飛び出した為に何にも持ってきてはいなかった。

財布はおろかスマートフォンもである。

なので一旦取りに戻る。

放課後の教室で練習している吹奏楽が響く通りを少し歩き、二年B組の教室へと辿り着いた。

「やっと終わった...！」

嬉しそうな声が教室の隅から聞こえた。

「あれ？ゆっきーじゃん、何してるの？」

周囲に花が見える位満面の笑みを浮かべる男子生徒に唯人は親しげに呼びかける。

「へっ...？...な、なん、なんでお前が、お前がいるんだ！！」

ゆっきーと呼ばれた白髪色白のどこか幼さを感じる童顔の男子生徒、ゆきむらましろ雪村真白は声がした方に顔を向ける。人に見られる事を予期していなかったのか動揺してガターンと勢いよく席を立ち、睨みつけて威嚇してくる。

「なんでって鞆取りに来ただけ？」

唯人は首を傾げて質問に答える。

「ああ、そうなのか.....じゃなくてっ！さっきの聞いてたんじゃねえだろうな？」

唯人が教室にいる理由を聞いて納得しかけたが我に返って真白はドア付近にいる唯人との距離を一気に縮め、胸倉を掴む。

「さっき？...俺が聞いたのは『やっと終わった...！』ってとこだけだ。てか、ゆっきー苦しい...ギブギブ！」

唯人は自身の服を掴む真白の手を叩く。

「丸っ切り聞いてんじゃねえかっ！」

真白は唯人に独り言を聞かれていた事がわかり、空いている手を握り締め後ろに引く。

「ゆっきー、暴力反対！なんでも拳で解決しようとしなないで！」

唯人は真白を宥めようとしているが火に油を注いだ。

「うるせえなあ！さっさと忘れろ！！」

真白の拳が唯人の顔面に近づこうと動き出した時、教室のもう一つの扉から何かが教室に入ってきた事を二人はまだ気付いていなかった。

「はあ…。唯人の奴、手間かけさせやがって。」

「まあ、いつもの事じゃん。」

橙輝と藍は部室を出て階段で一階に降りてきていた。

取り敢えず、教室を飛び出した事と四階が騒がしくなかった事から三回から下にいるのでは、と思ひ捜しに来た。

「何処探す？」

藍はこれからどうするか橙輝に問う。

「うーん…。」

橙輝も捜すとはいえ検討がついていない。広い高校の中で連絡がつかなければ唯人を捜すのは困難だ。手を拱いていた時だ。

「深刻そうな顔だね、どうかした？」

「それが唯人の奴…って、うあっ！…美都里先輩！」

橙輝は直ぐ近くに迫ってきていたのに萌葱の事に気づかず、顔を覗き込まれビクッと肩を震わせた。

「もおー、待ってよ浅葱。こっちはコンポ持ってんだからさあ。」

双子の兄を追いかけ、CDコンポを担いだ弟の浅葱が息を切らして追いつく。

「赤井君ならさっき会ったよ。」

「本当っすか！」

橙輝はまたとない情報に前のめりになって食い付く。

「ついさっきね、中庭で白い物体探してるみたいだからそれっぽいのが校舎の中に入っていったって言ってあげたよね。」

「うん、そうだよ。」

萌葱と浅葱が順々に話す。

彼らは双子で外見は薄緑色の髪、宝石が嵌っていると錯覚する瞳、この年頃の男子にしては少し高めの声、話すテンポは寸分違わず同じだ。辛うじて今は、CDコンポを担いでるか否かで二人を見分ける事が出来た。

「それじゃあ入れ違いになったっぽいね。」

藍は冷静に判断する。

「じゃあまた、上がるか…。ったく、あんのやろう、捜し出したらガツンと言ってやる。」

橙輝は溜息を一つつき、校舎の中を捜す事にする。

「…あれ？コンポのスピーカーに引っ搔いた後が残ってる。」

藍は浅葱の担いでるCDコンポをチラリと見て呟いた。

「あー…これね。どうも白い物体にやられたみたい。俺達が話し合ってた目離れた隙を狙われて、この有様って訳。」

浅葱は今までの経緯を藍に説明する。

「ほーんと、困っちゃうよね。それで俺達は部室に戻って怒られに行くんだもん…やめて欲しいよね。」

萌葱はあんまり困ってる様子も無く、むしろ笑顔で話している。

「もお、萌葱は…。もう少し真面目にしててよ。…ごめんね、引き止めて。赤井君捜し頑張っ
てね。行くよ、萌葱。」

浅葱は片手にCDコンボ、もう片手には萌葱の腕を掴んで校舎の中を歩き出した。

「じゃあ、俺達も行くか。」

橙輝は藍と共に降りて来た階段を上がっていった。

「ここにもいない...か。」

橙輝は疲労困憊といった様子だ。

「ふああ。...白い物体も見当たらないし、眠い。」

藍はお目当が見つからず、現状に飽きている。

彼らは二階を隈無く捜し三階へと上がって来ていた。

「...欠伸なんてして、昨日は夜更かししたのか？」

好転しない現状での沈黙を避けようと橙輝は話題を振る。

「んと、昨日シダヤにいて映画借りてその日に全部観て危うくオールしそうになった。」

シダヤは色彩高校の最寄り駅である南画布駅の近くにあるDVDやCDを貸し出す店である。

今話題の新作、不朽の名作は勿論、滅多に見かけないB級映画やインディーズのCDまで揃うと色彩高校の生徒や地域住民から品揃えに定評がある。

「あそこか。で、またホラー系か。」

大体藍が借りそうな映画は心得ている。

「うん。『ドキッ☆内臓破裂♪鮮血スプラッシュ花子さん』と『恐怖！こっくりさんVSフランケンシュタイン』っていうのを観た。」

藍はにこにこ笑顔で話す。

「...また、二流どころか三流の作品ばっかだな。しかもタイトルからしてスプラッタも混じってるじゃねか。それに、絶対十八禁だろそれ。」

半ば呆れながらもウキウキしている藍を見て少しだけ橙輝も気力が戻る。

「まあね。花子さんのお腹をナイフで切りきざんできるとことか良かったんだあ。ブシャアって血が吹いてさ、腸とか出てきて...」

藍がうっとり熱心に嬉々としてとんでもなく生々しい感想を述べていた時だった。

「丸っ切り聞いてんじゃねえかっ！」

向こうの方から怒号が響く。

「っ！...まさか、唯人の奴がなんかやらかしたのか！」

唯人は大体騒動の渦中にある。

長年の付き合いでわかりきったことだ。

「その可能性あるかも。とりあえずいってみよう。」

橙輝と藍は声がした方へと急ぎ足で向かって行った。

橙輝と藍が二年B組に到着したのは真白の拳が唯人の顔面を直撃する寸前だった。

「ちょっと待ったあああ！！」

橙輝は急いで真白に駆け寄り腕を掴む。

「とーちゃん！それにぞめさんもやっほー！」

殴られようとしていたのに唯人は楽しそうだ。

「雪村、とりあえず少し冷静になったら？」

藍は拳を下げるように諭す。

だが、少し鼻につく言い方だった。

加えて唯人の呑気な雰囲気も相まってようだ。

「んだよ！部外者は黙ってる！」

逆に真白を気分を逆撫でした。

そう、まさにその時。

びりびりびり。

紙が破ける音が教室に響いた。

「...ん？何、この音...？」

藍は教室の隅から聞えた嫌な響きに反応する。

「ぞめさんも聞えた？」

唯人も聞いていたようだ。

「紙を破いたって感じだな。...唯人、提出するような紙大丈夫か？」

橙輝も聞いていたようで唯人が大切な書類を置きっぱなしにして何かの拍子に破けたのではないかと心配する。

唯人は昔から興味のあることが起きると目の前にあることをすっぽかしてしまう。

そのことは橙輝が唯人から目が離せない原因の一つである。

「うん、俺は大丈夫だよ。全部鞆の中にしまってるから。...そうだ、ゆっきーは大丈夫？俺が来る前までなんかしてたよね？」

はたと唯人は思い出したように真白に問いかける。

問いかけた時だった。

最初は時が止まったように硬直していた真白だったが少しして唯人を掴んでいた手を放し、振り上げていた拳を下した。

顔が青ざめていた。

まさかと思っけていても聞えた方角、唯人が来る前まで行っていた自分の作業から結論は導き出される。

意を決して自分の机のある方に振り向いた時だった。

一番後ろで窓際の自分の机の上から何か丸い物体が開いていた窓へ飛び去り、小さな三角形が方々へと飛び散った。

「あれって、噂の白い物体！！待てー！！」

唯人は追いかけてやろうとしたが一向に前へ進まない。

「お前が待て！もう捜すのは御免だからな！」

橙輝は唯人の首根っこを掴む。

「白い物体なら任せて。」

藍が颯爽と後を追う。

しかし、白い物体は素早い。

藍がベランダに出た時にはもう姿はなくどちらに行ったかわからなかった。

「...ちっ、逃げた。白い物体速い...。」

藍はこれ以上追う事が出来ずに教室内に戻る。

「ぞめさんどうだった？」

唯人は嬉々と聞いてくる。

「案外速かった。もう少し計画練らないと捕まんない。」

藍は顎に手を当て早速白い物体について考えているようだ。

「はぁ...残念だよね。あんなに間近にいたのさっきまで気づかないなんて...。にしても、絶妙にカーテンでこっち側からは姿見えなかったし...でも、なんか丸っこくてそんなに大きくないってわかった事が前進だよね！」

唯人は白い物体を直接姿は見れなかったにせよ、カーテン越しに見られて興奮している。

一方で、真白は自分の席に戻っていた。

バラバラになって散らばる紙片を一つ一つ集める。

「...集めるの手伝おうか？」

橙輝は真白のさっきの真っ青な表情を見た時から心配なのだ。

ふるふると首を横に振るだけ。

橙輝からは真白の後ろ姿しか見えない。

唯人を殴ろうとした人物と同一人物とは思えない程小さな背中、色彩高校一の不良と名高い真白からは想像もつかない。

橙輝はふと足元に紙片の一つがあるのに気付き、拾った。

「...雪村.....歴史...課題？」

橙輝は欠片となった元のプリントがなんなのか推測する。

「ああ、それかあ。確かゆっきーの出席日数足んないからってつゆちゃん先生が課題渡してたんだっけ。」

いつの間にか唯人が此方にやって来ていた。

つゆちゃん先生こと肌之^{はだのつゆし}露史は歴史を教えている。

生徒からは優しく親しみやすいと評判である。

「...それって、結構やばいんじゃない？雪村を助ける為の課題でびりびりに破けて提出しないなんて流石の肌之先生もいい気分はしないだろうし...かと言ってオーダーメイドみたいなものだから他の子から借りてコピーも出来ないし...。」

藍は冷静に分析する。

「...雪村、俺達のせいでこんな事になって悪かった。肌之先生には俺達も謝りに行くから、許してくれ。」

橙輝は何時までそっぽを向いて散らばる紙片を集める真白の背中に語りかける。

くるりと真白が振り返った。

唯人、橙輝、藍の三人を睨み付ける瞳は薄っすらと涙が溜まり教室の蛍光灯の光でキラキラと宝石であるかの如く輝いていた。

「...どうせ、俺みたいなヤツが真面目にやろうなんて土台間違ってたんだろっ！」

真白の声は強がりと言うにはあまりにも震えていた。

「一旦落ち着けて、な？」

橙輝は慌てて冷静になるように呼びかける。

「取り敢えず、部室に戻る？その方が雪村も落ち着くかもだし。唯人も置いて動けるし。」

藍は橙輝に最善と考えられる策を伝える。

「そうだな...。それしかないだろうな。」

「ええー。白い物体探そうよー。」

橙輝は賛同したが唯人はまだ遊び足りないといった様子で駄々を捏ねる。

「唯人、お前なあ。いい加減しろよ...。」

唯人はなおもぶすつとして橙輝を見つめる。

どうやら部室に来る気はないらしい。

「藍、なんとかなんないか？」

橙輝は困って藍に助けを乞う。

「今度観たいドラマ借りられそうなんだ。一緒に観てくれるなら助ける。」

「おい、こんな時に要求突き付けんよ！.....いいよ、好きにしろよ。」

橙輝は近いうちに後悔するだろう。

悪魔に魂を売ってしまったと。

だが、今はまだ知る由もない。

藍は唯人に向き直り、口を開く。

「部室にはタブンカットがあるんだよね。だから唯人が来なかったら一人分の分け前は六分の一になって俺達は嬉しいよね。」

藍は唯人を菓子で釣る作戦に出る。

「ええっ！なんでそんな大切な事言ってくんないの！俺も食一べーたーいー！」

思惑通りに釣れる。

「なら、部室に今直ぐ来るよね？」

藍はトドメを刺す。

「うん！早く行こ！」

藍の作戦は鮮やかに成功を収めた。

「雪村も来いって、詫びって訳じゃないけど...俺達にも責任の一端はあるからな。一緒に考えよ

うぜ？な？」

橙輝は今にも泣き出してしまいそうな真白に優しく接する。

「...そんな.....そんなにやぎじぐずんな...うう。」

堤防は決壊し、雫が頬を伝う。

「おいおい...落ち着いてくれよ。ほらハンカチ貸すから泣き止めよ。」

橙輝は自身のハンカチを差し出し真白の手に握らす。

「おーい！とーちゃん、ゆっきー早く行こう！」

唯人と藍は既に教室を出て廊下にいる。

置いてかれまいと真白の手を引き橙輝も後を追って部室に向かった。

橙輝と藍が部室から出て行った後、黄輝と由樹葉は菓子と飲み物でほんわかと談笑していた。

「行っちゃたね、二人共。」

由樹葉は自身で淹れた緑茶を一口飲む。

「...そっすね。」

黄輝も炭酸を一口飲む。

「遠慮せずお菓子食べちゃっていいよ。沢山あるし。」

黄輝に勧めて由樹葉も一つ取る。

「はい！」

黄輝も続けて一つ取る。

「そう言えば、今日は少し遅れて来たけど何かあったの？」

由樹葉は黄輝が自分より後に部活に来たのがなんとなく気になって聞いた。

「今日、日直が回って来ちゃって、色々やってたら遅くなっちゃったんです。本当はひめしろ姫城の番だったんですけど...撮影で数日間学校来れないんで次の俺に一足早く来たって訳なんです。」

黄輝ははあと溜息を吐く。

黄輝と同じ一年D組のひめしろ姫城桃太は高校生でありながら俳優をしている。

今回の休みは桃太主演の連続ドラマの撮影との事だ。

一年D組では日直は席順で回って来る制度になっており、桃太の欠席のおかげで黄輝に一足早く順番が回って来た。

「そうだったんだ。お疲れ様、黄輝君。」

「...俺、要領悪いから遅くなっちゃったんです...。」

本音がぼろりと溢れる。

「黄輝君、そんな事ないよ。確かに器用じゃないかもしれないけど、でも最初のうちは皆手探りで早くなて出来ない。慣れていけばきっと大丈夫だよ。」

由樹葉は黄輝を勇気付けようとする。

「そうですよね...。でもさっき兄貴は俺を連れて行こうとはしなかった。兄貴と話せなかった。」

同じ部活動を通し橙輝と黄輝は一時より仲は改善されていた。だが、まだまだ兄弟の間にある溝はそう簡単に埋まるものではないのだ。

「焦らなくていいよ。ゆっくり確実に一步一步距離を縮めていけばいいんじゃないかな。僕らもいるし、お手伝い出来る事があつたら何でも言ってね。」

由樹葉は笑顔で黄輝を励ます。

「...すいません。湿っぽくしちゃって。」

陰っていた心に少しだけ日が射す。

そうだ、焦っていても仕方がない。

黄輝は少しずつ橙輝に歩み寄ると決めていたのは自分だと思い出した。

黄輝と由樹葉が談笑を交わし続けて二十分程が経った時だった。

ガチャ。

部活の扉が開かれた。

「^{かい}權先輩、こんにちは！」

「權君、お疲れ様。」

「...悪い、遅くなった。」

黄輝と由樹葉が新たにやって来た部員を迎える。

すらっとした背丈と美しく整った顔の涼やかな青髪の男子生徒、^{はるせかい}青世權は三年A組所属で生徒会会計の職を務めている。

高身長と美しい顔、生徒会に所属、加えて学年でも指折りの秀才且つ少し素っ気ない部分もあるが心配りもきちんとできる性格、トドメに父親の職業は経営者という權は女子生徒からとても人気がある。

「今日は何にする？」

「冷たいやつ。」

由樹葉に返事をして權は荷物を置いて席に座る。

机に置いてある菓子を一つ取り食べる。

「はい、アイスコーヒー。」

ことりと權の目の前にはグラスが置かれる。

「ありがと。」

菓子の甘さを押し流す様に一口飲む。

「今週のステップはまだある？」

少年ステップとは人気の週間少年漫画誌である。

毎週月曜日発売なので金曜日である今日まで部室にあるか權は少し心配だった。

「あるよ。今週のツーピースも面白かったんだ。」

席から立ち上がって由樹葉は本棚の三段目から漫画誌を抜く。

「ついでにヤンステとサタデーも読む？」

ヤングステップは青年漫画誌で少年サタデーはまた別の少年漫画誌だ。

「ああ。」

權は端的に頷く。

三冊の分厚い漫画誌が權の元に置かれる。

權は端から見れば漫画には縁遠いと思われがちだし、本人も感情があまり表には出ない。

しかし、權も至って普通にいる男子高校生であった。

「一週間お疲れ様、存分に寛いでね。」

由樹葉はいつも生徒会の仕事で忙しくしている權に労いの言葉をかける。

色彩高校の生徒会、基に高校全体で生徒会会長の^{きょうごくきんか}京極金華と生徒会副会長の^{とうごうぎんが}東郷銀河の派閥に大きく二分されている。

その為か根元である生徒会は殺伐とした雰囲気がある。

權は二分された派閥の何方にも属さない無党派層であり、生徒会では殆ど同じ立場の人間はいない。

そんな中で生徒会の職務を全うしている。

「悪いな、いつも。」

「僕、お節介を焼くの好きなだけだから気にしないで。」

由樹葉は席に着いてお茶をすすりながら菓子をつまむ。

「そう言えば...青世先輩って今日生徒会でしたっけ？」

黄輝はふと気になった。

本来なら金曜日はずっと虹色研究部の方に顔を出しているはずなのだ。

「...白い物体騒ぎで、備品が破損したとかで購入申請が山の様に来て急遽呼び出された。」

漫画誌のページをペラペラとめくりながらさっきまでの事を一言でまとめる。

「そんなに何処もかしこもなってたんだね。」

由樹葉は少し驚いていた。

由樹葉自身は被害にあっていない為実感があまりなかった。

「ほんと白い物体って何なんですかね...？」

黄輝は顎に手を当てて唸る。

ガチャ。

また、部室の扉が開かれる。

「つな先輩タブンカットまだ残ってる?!」

唯人は真っ先に由樹葉目掛けて飛んでいく。

「唯人君、こんにちは。まだこんなに残ってるから大丈夫だよ。余ってるから食べて食べて。」

由樹葉は机の中央に鎮座する山に手を向ける。

「よかったあ！いただきます！」

唯人は椅子に座り早速菓子の山から一つ取り袋から取り出しサクッと音を立てる。

「...他に誰がいるんすか？」

橙輝と藍の後ろに人影が見えた。

「雪村。唯人が泣かせた。」

藍がざっくりまとめた。

「どういう事っすか?!」

「ええっ?!唯人君、どうしたの...！何かあるなら相談に乗るよ！早く謝った方がいいよ！」

ざっくりまとめ過ぎた事により、黄輝と由樹葉は混乱に陥る。

「ぞめさん、酷いよ～。泣かせてなんかないもん！」

唯人は菓子を頬張りながらむっとする。

「俺達も途中からしか事の次第を見てないから変な事言うな！」

橙輝は藍の背を叩く。

「とりあえず、両方から話聞いたらどうだ？」

權は漫画誌をぱたりと閉じ、また別の漫画誌を手に取り出しながら会話に入って来た。

真白が泣き止むまで数分が経った。

落ち着いた頃を見計らい、唯人からも一緒に聞き出した。

「成る程なあ...。」

「ねえねえ、とーちゃん。俺、悪くないでしょ？」

「確かにムカついて手を出そうとした雪村も雪村だけど...挑発した張本人が悪い！」

隣に座っていた唯人の脇腹を橙輝は肘で小突く。

「いてっ！...酷いよお。ねえ、ぞめさん？」

今度は藍に同情を求める。

「絶対楽しんでたよね？」

唯人に冷ややかな視線が突き刺さる。

「こーちゃんもそう思わない？」

今度こそはと黄輝の方に目配せをする。

「...いくら先輩でもそれは...。」

黄輝からは軽蔑の眼差しが向けられる。

「はるるん先輩！」

「.....。」

ペラペラとページをめくる音だけが返ってくるだけだった。

「皆んな酷い！でも、つな先輩は違うよね！」

頼みの綱である由樹葉を見つめる。

「...唯人君、人には見られたくない事が一つはあるんだよ。唯人君がもし、見られたらどう思うかな？.....謝るなら、僕も一緒に謝ってあげるから...ね？」

最後の希望は潰えた。

「俺は悪くないのに！みんなしてなんだよー。」

唯人は拗ねる。

が、その時だった。

頭を鷲掴まれ、視界が暗く茶色くなる。

「雪村、本当に悪かった。...唯人謝れって。」

「むう。やめてよ、とーちゃん。.....ゆっきー...ごめん。」

「...もう、いいよ。俺も、悪かったから。」

一応仲直りは成立した。

部室内にはほっとした喜びの雰囲気漂う。

「.....仲直りはいいが、これから如何するつもりだ？」

權は漫画誌を閉じて机に置く。

「俺が怒られるなら別に問題ねえよ。問題児だしな。...だけど。」

「そんなことないって！」

「そんなことないだろ！」

「そんなことないと思います！」

「そんなことないよ！」

唯人、橙輝、黄輝、由樹葉は一斉に反応する。

「雪村は実際そこまで問題児じゃないでしょ。」

藍も一足遅れてだが反応する。

虹色研究部は以前二年B組の学級委員であるあんやくの闇烙黒乃に頼まれて真白の出席日数の危機を救った事で真白の事を知った。

真白と関わるうちに本当は喧嘩した訳ではなく上級生に絡まれた同級生を助けて停学処分になっていた事、他校の生徒を殴ったのはナンパされていた女子生徒を助ける為だった事を知った。

真白は優しい人だと虹色研究部は知っている。

「何か言いかけたようだが何か他にあるんだろ？」

權は尋ねる。

「...課題貰えたの黒乃のおかげだったんだ。.....あんま授業に出てなかった俺の為に先生に掛け合ってくれてたんだ。.....黒乃の顔に泥は塗りたくない。悲しい思いはさせたくない.....。」

真白はぽつりぽつりとか細い声で語っていく。

「そうやって真白が僕には何も話さないで僕以外の人を頼っているのが僕は悲しいんですけどね。」

突如第八の声が部室内に響いた。

「！」

真白はビクリと肩を震わせる。

「待って下さいね。もう逃げられるのは勘弁ですよ。」

真白が席を立てて新たに現れた黒髪の何処までも底の見えない漆黒の瞳をした男子生徒、闇烙黒乃から逃げ出そうとしていた。

しかし、黒乃は真白の行動を予測していたようだがっしりと腕を掴んでいた。

「わっ！くろさまだ！」

唯人は嬉しそうに黒乃に手を振る。

「なっ、いつからいたんだよ。」

橙輝はびくりと肩を震わせた。

「入る時はノックしたら？」

藍は何故一言も言わずに入ってきたんだと言う。

「こんにちは！闇烙先輩！」

「いらっしゃい、闇烙君。」

「……………」

櫛はちらっと黒乃の方を見て興味がないのか視線を外しグラスに入ったアイスコーヒーに口をつけた。

黄輝、由樹葉、櫛は扉の見える壁側に座っていた為、黒乃に気づいていた。

黒乃が唇に人差し指を当てていたので黙っていたのだ。

「皆さん、お邪魔してます。」

黒乃はにこりと微笑する。

「全く…探しましたよ？学級委員会が終わって帰ってきたら教室にいないのでびっくりしましたよ。」

真白に視線を戻し語りかける。

「離せ！」

さっきから腕を振って黒乃の掴んでいる手から解放されようと試みているのにちっとも緩まない。

「少しは人の話を聞いてくれませんかね、全く…困った子ですね。」

ふうと溜息をつく。

真白の抵抗などまるでないかのように顔色一つ変わらない。

「ちゃんと課題をやっていたようですから仕置きをなんてしないのに逃げなくてもいいじゃないですか…？」

黒乃の声はに悲しみの色が滲んでいる。

「それは…その……。」

「課題が破れてしまったのは不慮の事故なのでしょう？…なら、なんで僕に相談してくれないのですか？」

黒乃は畳み掛ける。

「……どうしたらいいかわかんなくて……黒乃が俺の為に課題貰ってくれたのに……。」

「二人で謝りに行きましょう。肌之先生なら真白の持っている課題の破片を見ればわかってくれるでしょう。」

真白がくるりと振り返る。

「ごめん、黒乃。俺の所為で。」

「いいんですよ。……でも、今度からは僕に相談する事にして下さいね？」

「…わかった。」

「後…僕以外に泣かされないで下さい。真白を泣かせていいのは僕だけですからね。」

「なっ、何言ってんだよ！」

ばしりと黒乃の腕を叩く。

顔は見る見るうちに誰が見ても紅潮してるとわかるほどに赤らんでいた。

「ふふっ。いつもの真白に戻りましたね。さっ、行きましょうか。虹色研究部の皆さん、お邪魔しました。」

再び真白の手を取り半ば強引に黒乃と真白は部室から出て行った。

ばたんと扉がしまる。

部室内には虹色研究部の六人だけになった。

「タブンカットも食べたし...白い物体探しに行ってくる。」

唯人はがたりと席を立つ。

「待て。」

橙輝は即座に唯人の腕を掴む。

もう二度も探しに行くのはごめんだ。

「止めないでよ～！白い物体が何なのか知らない俺は死ぬに死ねないんだからあ！」

唯人がむっと頬を膨らませる。

「別に探しに行ってもいいが...その前に再来週の監査の時に何するか決めてからにしろ。」

權が何事もないかのようにさらりと言う。

權の言う監査とは色彩高校の部活動を生徒会が見に来る事である。

年二回行われ、監査に来た生徒会の担当者からきちんと活動していないと判断されると部費を貰えなくなる。

本来なら監査が来る日程はわからないはず抜き打ちだが、生徒会に所属する權のおかげで事前に準備が出来るのである。

「えっ、もうなんだ。じゃあ準備しなきゃだね。」

由樹葉はかたりと席を立ち本棚に向かう。

「そういうの先に言って下さいよ...。」

「先に言うも何も来た時には全員揃ってなかったし、揃ったと思ったら雪村がいたからな。」

「しょうがないって、とーちゃん。」

「あんま、かりかりしててもどうしようもないじゃん。いつもの事だし。」

ぽんと唯人と藍は両側から橙輝の肩に手を置く。

「お前らが言うなよ...。」

だから何時も唯人と藍に振り回されるのだと橙輝は半ば諦めの境地に辿り着いたのだった。

「じゃあ、準備も出来たからどうするか決めよう。」

由樹葉が席に戻り、リングファイルから一頁分のノートを取り出し自身のペンケースからシャープペンシルと消しゴムを準備した。

「確か、前は水滴の大きさを調整してミー散乱？っていうので白虹を作ったですよ！調整するだけで色が濃くなったり薄くなったりして面白かったです！」

黄輝は前回の監査の時に行った活動を楽しそうに語る。

「じゃあ、次はどうする？前は色にフォーカスを当ててやったし、今度は形に拘る？」

藍は前回の事を踏まえて提案する。

「いいね、いいね！面白そう！」

唯人は目を輝かせる。

「じゃあ、色々な形を作る方向でいいかな？」

由樹葉が皆に聞く。

「いいんじゃないですか？...じゃあどういう形にするかですよね。」

橙輝が更に深く掘り下げる。

その時だった。

コンコンと二回のノック音が聞こえた。

虹色研究部にまた新たな来客がやって来た。

「お邪魔してもよろしいでしょうか...？」

なんだか頼りない、弱々しい声が聞こえた。

「どうぞ。」

由樹葉が受け応えをする。

「失礼します。部活動中申し訳ございません。青世先輩はいらっしゃいますか...？」

何とも丁寧な言葉遣いなブロンズ色の綺麗な髪、金属ような輝きを放つ瞳だが何処かビクビクと怯えた表情をした男子生徒。

腕には生徒会と書かれた腕章を付けている。

「どうしたんだ、京極？」

權から京極と呼ばれた彼の下の名前は銅華^{どうか}。

二年A組所属で生徒会会長の京極金華の弟であり、自身も生徒会書記を務めている。

「申し訳ございません！」

銅華はいきなり頭を下げる。

「何かあったのか？」

「先程、青世先輩に作成して頂いた書類が紛失してしまいまして...。」

銅華の瞳には薄っすらと水が溜まって更に輝きを増す。

「要は、もう一枚作ればいいのか？」

「大変情け無い事ですが...その通りです。書類に関してはデータからもう一枚印刷して来ましたので、署名と押印をして頂けないでしょうか？」

銅華は手にしていたクリアファイルから一枚の紙を權に手渡す。

「今まで書類を失くすなんてミス無かったと思うが何かあったか？」

さらさらと自分の名前を書き持っていた判子を押す。

「自分でもちゃんと金華兄様...会長の机に置いたつもりだったのですが...。会長がお戻りになった時には無かったと仰いまして...。」

權から出来上がった物を受け取る。

「ただ...会長は不思議な事を聞いてきたんです。生徒会室が荒らされていた、生徒会以外の人間が入ったのか...と。」

銅華は依然として暗い声音だ。

特に生徒会室には誰も来客は来なかった。

自分は何か金華の気に障る事をしてしまったのかと気が気ではない。

「もしかしたら...白い物体のせいなんじゃない？」

藍は今までの被害から予測する。

「染田さん...。ありがとうございます。そうかもしれません。」

「...あんまり京極から言われた事は気にし過ぎなくていい。」

權はいつも金華に叱咤されている銅華を目の当たりにしており、気に掛けている。

「青世先輩もいつもありがとうございます。」

銅華の顔に少しだけ笑顔が戻る。

「少し長居してしまいましたよね。私はこれで失礼します。ありがとうございました。」
ちらりと壁に掛かる時計を見てから銅華は部室から去って行った。

「流石、はるるん先輩！って感じだったよね、こーちゃん。」

唯人がさっきの櫂の銅華に対する対応への感想を黄輝に求める。

「そうっすね！流石、モテる男のやる事は違うって感じっすね！」

唯人と黄輝が櫂の事をもてはやす。

「……………」

凍えた視線が唯人と黄輝を射抜く。

「別にいいじゃん。褒めてんのにい…。」

「……………」

「…とりあえず部活のやつ決めようか。」

見かねた由樹葉が銅華が来る前の話題を戻す。

「確か、形に拘るって事でしたよね？何の形にします？」

橙輝も話題を戻そうとする。

「丸い虹っていうのがあるみたい。」

ほら、と藍がスマートフォンを机の真ん中に置く。

「本当だ、丸い！これ作ってみようよ！」

唯人が楽しそうにはしゃぐ。

「お、下の方に沢山虹が架かってるやつがあるな。……過剰虹っていうのか。」

橙輝は藍のスマートフォン画面に指を滑らせて他の画像も探す。

「あっ、こっちには逆さ虹っていうのがありますよ！」

黄輝も楽しそうにスマートフォン画面を眺める。

「沢山あるからどれにするか悩んじゃうね。」

由樹葉もにこにこ笑顔で珍しい虹の画面を見つめる。

虹色研究部が賑やかに次の活動内容を決めている時だった。

ガチャッとノックもせず扉が開いた。

「うんうん、ちゃんと活動してるみたいだね？」

やる気を微塵も感じさせない声が部室に響く。

「あいのん先生だ！また仕事放り出したの？」

紫音に向かって唯人は手を振る。

「ちゃんとしてきたんですね...？」

橙輝は疑いの目を向ける。

「赤井も明駕も酷くない？俺の事なんだと思ってるワケ？」

紫音の態度からは傷ついているようには思えない。

紫音は部室に入ってから真っ直ぐに冷蔵庫に向かう。

目当ての物を取り出して空いている席に座る。

そして、机に置かれた飲み物に一同は驚愕する。

「あいのん先生、ビール持って来たの！凄い！」

唯人は面白半分で興味津々といった様子だ。

「教師以前に社会人としていいのかよ！」

橙輝は驚かずにはいられない。

「先生、ビール学校に持ってきちゃ駄目ですよ！」

黄輝も驚いて叫ぶ。

「愛川先生、いくらなんでも仕事中は駄目ですよ！先生が顧問じゃなくなったら僕らどうしたら...。」

由樹葉は先の事まで考え悲観する。

「いくら俺でもこんな不祥事は庇いきれないから。」

權は淡々とした口調だが、迷惑だと言いたげな視線を向ける。

「教師が昼間から部室で酒飲むってどうなの？」

藍は失望したと言いたげだ。

「ちょっとさっきからヒドくない...？それに...ちょっと、ここみなよ。」

紫音は缶の中央、商品名を指差す。

「オカピビール...フリー？」

由樹葉が読み上げる。

「そ、要はアルコール入ってないってこと。」

紫音は自慢気に言う。

「...紛らわしいことするなよ...。」

橙輝ははあと溜息をつく。

「なんでノンアルコールビールなんて持って来たんですか？」

黄輝は純粹に疑問に思った。

アルコールがなかったら普通の清涼飲料水と変わらないではないかと。

「なんで...って、そりゃあ、さ。昼間からビールっていいよね？たとえ、雰囲気だけでも...ね？」

」

紫音は上機嫌に説明する。

「そして...この鮭とばをつまみにしてビールを一口ってね。」

白衣の右ポケットから一口サイズの細身の鮭とばが入った袋を取り出し、これ見よがしに見せる。

「.....丸い虹、過剰虹、逆さ虹、全部作るのは無理だからどれにするか？」

櫂は紫音の事などまるでなかったかのように話を戻す。

「相変わらず、青世ってドライというか塩対応だよな...？」

紫音は全く気にせず鮭とばを口に含み、ぐびっとノンアルコールビールを呑む。

「じゃあ、多数決で何にするか決めようか。それでいいかな？」

由樹葉の提案に皆が賛同し、多数決によって決める事とした。

丸い虹には櫂、過剰虹には橙輝と由樹葉、逆さ虹には唯人と黄輝と藍が順々に手を挙げた。

よって三票が入った逆さ虹に決まり、どのような方法で作るかを話し合おうとした時だった。

ドンッと鈍い音が廊下から聞こえた。

「じゃあ、どうやって逆さ虹をつく……？なんか廊下からかな…凄い音がしたね。」
由樹葉が音に反応する。

「本当だ！なんの音かな？見に行ってくるね！」
ぱっと立ち上がり唯人は外に出て行く。

「おい、待て！先行くな、唯人！」
慌てて橙輝は唯人を追いかける。

「何が起きたのかな…！」
藍も続けて外に出る。

部室の前の廊下には、アプリコットオレンジの長髪が特徴的な細身のチェックのスカートを穿いた生徒が倒れていた。

廊下は生徒の物と思しきものと、食べ物のような破片が飛び散っている。

「あんちゃん！どうしたの？」
「杏あんず！何があったんだ、大丈夫か？」

唯人と橙輝が駆け寄る。

「…橙輝君、唯人君…。ごめんなさい、私…。」
杏と呼ばれた生徒、ゆうきあんず優木杏は力無く返事をする。

「辛かったら何にも喋らなくていい。」
橙輝は杏をお姫様抱っここの形で抱える。

「…ありがとう、橙輝君。」
杏も弱々しい笑みを向ける。

橙輝は杏を部室に連れて、運良くその場にいた保健医でもある紫音に診せる。

一方で廊下に出ていた唯人と藍は周辺に散らばっていた杏の持ち物を拾い集め食べ物、菓子と思われる甘い匂いを放つ破片を片付けていた。

「あんちゃん大丈夫かな？」
「大丈夫でしょ。…それよりも一体何があったのか凄い気になる。」

藍は事件の予感を察知してわくわくしている。

「ただ誰かにぶつかられたとかじゃなく？」
唯人は特に気になるところはないから疑問に思う。

「だったら、なんでこんなに持ち物が散乱してるの？」
藍は明らかに手の加えられたと見える散らばり具合に注目する。

自然には起こりえない程に散らばっていた。
「…確かに！」

「それに、ケーキ…かな？スポンジっぽいのが細かくなり過ぎている気がするんだよね。」
「言われてみれば、そうだ！これは事件の匂いですな、名探偵ぞめさん！」

唯人も藍につられてか興奮する。

「…いつから、探偵になったのさ。…それより、助手の唯人君…手止まってるんだけど？」
唯人がさっきから片付けの手が止まっている事を注意する。

「あう…。ごめんなさい。」

しばらく唯人と藍は周辺を綺麗にしていた。

菓子の破片おかげか廊下がべたべたで水拭きをしないといけなかった。

骨の折れる作業だった。

「掃除終了ー！疲れたあ...。」

唯人と藍は部室に戻った。

「はい、優木の鞆。」

藍は鞆を橙輝に渡す。

「悪いな、二人とも。」

「優木に話聞いていい、彼氏さん？」

杏と橙輝は付き合っていた。

一年生の時に杏が橙輝に熱烈なアプローチをして付き合いが始まった。

「ああ。大した怪我もなかったから大丈夫だ。」

ベランダの近く、茶色のパーテーションで仕切られた先に置かれているソファに杏は座っていた。

「大丈夫？」

「うん。心配かけてごめんなさい。愛川先生からは頭打ったみたいだけど今日一日安静にしてれば大丈夫だって。」

「なんで、倒れてたの？」

藍は核心を尋ねる。

「それが、私にもわからなくて。歩いてたら斜め後ろから何かがぶつかってきて。でも...みんなに食べて貰おうと思って虹色ケーキを作ってきたのに...落としちゃって...。」

杏は俯いて経緯を話す。

明らかにケーキを落としてしまった事がショックのようだ。

「別にいいって、杏が無事ならいいんだ。」

「...橙輝君は、優しいね。」

橙輝と杏はしばし見つめ合う。

「...何かについて何か覚えてない？」

藍は甘い雰囲気でも容赦なく尋ねる。

「あ、うん。姿は見れなかったけど、当たった感じだと...あんまり大きくなかったよ。硬くもなかったかな。」

記憶を辿りながら答える。

「丸い感じだった？」

藍は更に尋ねる。

「...うん、そんな感じだったかな。」

「ありがとう。」

藍は何かを得たのか質問を終わらせて考え込む。

「今日はもう帰った方がいいな...。送って行く。」

「さすがに、橙輝君...心配し過ぎだよ？」

ふふっと微笑む。

「なら、せめて校内はだけは送って行く。また、危険な目に会うかもしれないし。」

「じゃあ、そこまではお願いしようかな。」

杏はソファから立ち上がり鞆を持ち上げて橙輝と共に部室から出て行った。

「さて、白い物体捕獲作戦を練るよ。」

藍は唯人に呼び掛ける。

「やっぱり、さっきのって白い物体のせいだったの？」

「今までの情報と合致したからね。」

藍は唯人だけでなく、虹色研究部全員を巻き込んで白い物体捕獲に動き出した。

橙輝が杏を昇降口まで送った後、部室に戻ろうとした時だった。

「明駕君ですね。少しいいですか？」

茶色の小ざっぱりとした髪に眼鏡をかけ、きっちりとしたスーツの男性が話しかけてきた。

「茶常先生、どうしたんですか？...もしかして、愛川先生ですか？」

橙輝は法蔵が自分に話しかけて来る理由が大体わかっていた。

「話が早くて助かります。何処にいますか？」

法蔵の額は薄っすらと汗で濡れている。

相当捜し回ったのだろう。

「部室っす。これから戻るんで一緒に行きますか？」

「ええ、そうさせていただきます。助かりました。」

こうして、橙輝は法蔵と共に部室に戻った。

「今戻りま...」

「愛川先生！！」

橙輝の声を遮り、法蔵の雷が紫音に落ちる。

「...うえ.....。」

紫音はいかにも嫌そうな顔をする。

法蔵はずかずかと紫音の前まで歩み寄る。

「ちょっと、勤務中になんて物を飲んでるんですか！！」

法蔵は机の上のノンアルコールビールの缶を目の当たりにし、更に剣幕を強める。

「いや、これ、ノンアル...」

「アルコールが入っていようがなかろうが酒類に見える物は持って来ないで下さい！！それに生徒の前でなんて言語道断！！」

法蔵の勢いに紫音はたじたじのようだ。

「仕事も途中で放って...いい加減になさい！！」

「...仕事したじゃん...。」

「今日中のものはでしょう！まだまだやってもらわないことがあるんです！！」

法蔵は紫音のワイシャツの襟首をがっとう掴む。

「えっ、何、ちょっと...」

「引きずっても連れて行きます！！」

紫音は法蔵に引き摺られる形で職員室に連れていかれ、ばたんと大きな音を立てて部室の扉は閉まった。

「...相変わらずだね、あいのん先生も。」

「とりあえず...橙輝も戻ってきた事だし、計画実行しよう。」

藍がさてとと席から立ち上がる。

「計画って？」

橙輝は先程部室に戻ったばかりで話が見えない。

「橙輝君が送りに行ってから、白い物体を捕まえようって話になったんだよね、さっきまで計画

を練っていたんだ。」

由樹葉が戸惑う橙輝に助け船を出す。

「優木の仇とらなきゃね。」

藍は仇打ちにしては嬉々としていた。

「仇打ちにしちゃ楽しそうだな…。本当のところは白い物体の正体に興味があるって感じだな。」

「そう？まあ、とりあえず行こう。」

藍は何を言っても聞きそうにはない。

橙輝は寧ろ自分がストッパーとしてついていけないといけないように感じていた。

こうして、白い物体捕獲作戦が始まる事となった。

「...一向に現れないな。」

橙輝は三階廊下を歩いていた。

作戦の為、ペアを組んで三チームを作り本校舎全体を見回っていた。

藍の見立てでは、白い物体はまだ本校舎内にいて、大きさはあまりないとのことから虹色研究部
部室前からそう遠くには移動出来ないと考えたようだ。

「また、戻ってきたな...。バトンタッチだ、唯人。」

橙輝は階段で待っていた唯人と変わる。

唯人と橙輝はペアであり、主に三階と西階段を担当している。

「とーちゃん、おかえり。こっちも異常無しだよ...。」

唯人は最初は楽しそうにしていたが、白い物体が一向に現れずに退屈そうにしていた。

その時だった。

ブーブーと唯人と橙輝のスマートフォンが震えた。

「おお、来たのかな！」

「まさか...。」

急いでスマートフォンの画面を確認する。

『もう、部室帰る。寝たい。』

權がうんざりだとメッセージを送って来た。

もうかれこれ三十分はなんの手がかりもない。

權が辞めたいというのも頷ける。

『だ、駄目だよ！もう少しだけ頑張ろうよ、ね？』

慌てて由樹葉が繋ぎ止める。

由樹葉と權はペアで一階・二階と中央階段を担当していた。

どうやらあちらも異常無しのようなのだ。

特段変わった事がないとわかりトークアプリを切り画面を消す。

「はるるん先輩も飽きてるし、俺も戻りたいなあ...。せめて、別の場所に行ければいいのに。」

白い物体に興味を示した唯人でもやはり同じ場所で身構えてるのは我慢ならないようだ。

「まあ、もう少し待てば現れるかもしれな...」

ブーブーとまたスマートフォンが振動した。

「なにになに？またはるるん先輩かな？」

唯人と橙輝は仕舞ったばかりのスマートフォンを取り出した。

『白い物体が現れました』

『四階に現れました』

黄輝からの連絡が入る。

「お、来た来た！待ってました！とーちゃん行こう！」

水を得た魚のように唯人の瞳は輝きを取り戻した。

「ああ。でも、走るなよ？」

念を押す。

唯人に無茶はさせられないから。

「わかってるって。全く心配性だよね、とーちゃんは。」

唯人と橙輝は階段を上がり、四階へと向かった。

「やっほー、つな先輩にはるるん先輩！」

四階に上がった丁度、由樹葉と權にばったりと遭遇した。

「豊緑先輩と青世先輩がこちら側に来たということはあっちにいるって事ですか？」

橙輝は由樹葉と權がやって来た普通教室のある方向とは真逆の部室や特別教室のある方向を指差す。

「そうみた…」

由樹葉が頷いた時だった。

唯人、橙輝、由樹葉、權のスマートフォンが一斉に震える。

画面には藍のメッセージが表示されていた。

『オカルト研究同好会に白い物体が入っていった』

「行かなきゃだね！」

四人は本校舎西側の角に位置するオカルト研究同好会部室に向かう。

オカルト研究同好会部室の前の廊下だけは何故だか電気が消えていて薄暗い。

もちろん部室内も電気はついていないようだ、半開きの扉からは光が差し込んでこない。

「何してくれんだね！折角の儀式が台無しじゃないか！！」

けほっと咳き込みながら一人の男子生徒が出てきた。

「あややだ！どうかしたの？」

唯人が慌てて駆け寄る。

あややと呼ばれた生徒、草津菖蒲は赤みがかった紫色の瞳できっと唯人達を睨みつける。

「どうかしたではないのだよ！！白い物体が入って来たとかで染田と明駕の弟がいきなり入って来て室内はぐちゃぐちゃだ！！」

菖蒲の顔は当たりは薄暗いにも関わらず紅潮していると認識できるほどだ。相当怒り心頭のようなうだ。

「え、あの中に白い物体がいるの！行かなきゃ！！」

怒る菖蒲を気にもせず唯人は微かに煙りすらでるオカルト研究同好会部室に突っ込んでいく。

「お、おい、待てよ、唯人！」

いきなり走り出した唯人に遅れまいと橙輝も後を追って部室内に入っていく。

「唯人君、橙輝君、待ってよ！」

由樹葉も慌てて後を追う。

「…ったく。しょうがないか…。」

權も渋々暗闇の中に身を投じる。

「おい、お前達！人の話を聞きたまえ！！」

菖蒲の怒声が誰も居なくなった廊下に虚しく響き渡った。

部室内は想像以上に暗かった。

カーテンも遮光性の高いものを使っているのか晴天だった今日の太陽を防いでいた。

「白い物体ー！何処にいるのー！」

唯人の陽気な声が響き渡る。

真っ暗闇が楽しいようだ。

「唯人、煩いっ……ちょっと、待て！なんだこの匂い！」

橙輝は鼻腔を強烈に刺激する香りに顔を顰める。

部室内には重く古くさいような、線香のような、十七年の人生で今まで嗅いだ事のない匂いがしている。

「うげ…やっぱ、外出る。」

橙輝は匂いに早くも厭気が差し出ようとする。

「うわぁ！」

黄輝が突然大声をだしたと同時だった。

ドンと何かにぶつかる音が響く。

「…なんかこっちに来るな。」

倒れてくる何かの気配を感じ橙輝は慌てて移動する。

ガターンと盛大な音が鳴る。

「みんな、大丈夫!?」

由樹葉は心配だった。

真っ暗闇の中で虹色研究部の皆が怪我をしてしまったらと思うと怖かった。

「俺は大丈夫だよ！」

「俺も大丈夫っす。」

唯人と橙輝には何もなかったようだ。

「いてて…。」

黄輝の声が聞こえた。

「黄輝君、どこに…って何?!」

由樹葉が黄輝を捜そうとした時だった。

足元を何かが通った。

固めの布地のようにごわごわしたものが擦れる音が聞こえた。

「そっちの方にいった？」

藍の声が聞こえ、足音が近づいて来る。

「藍君？何処に…わっ！大丈夫？」

「ごめん、それより白い物体はどっちに行ったの？」

思い切り正面から衝突してしまう。

だが、何時も衝突する勢いで抱きついて来る人物がいるおかげで慣れていた為か何とか抱き留める事が出来た。

「また、今度はなんだ。…おっと。」

權の方で何かがあったようだ。

「權君、どうしたの?!」

「何か came。結構ふさふさした毛が生えてた。」

「来たなら、捕まえてよ。」

藍は何をしているんだと權にツッコミを入れる。

「白い物体が汚れてたやだし、触りたくない。...それにまずは電気を点けるべきだろ。」

「青世先輩、本音だだ漏れですよ...」

でも、まず電気を点けるのは賛成です。」

橙輝は權にツッコミを入れつつ、自分も電気を点けに動こうとした時だった。

「な、な...っんだよ!」

「とーちゃん!大丈夫!」

橙輝に何かあった様子であったので慌てて唯人は声のする方に駆け寄る。

「ああ、大丈夫だ。悪いな、心配かけたて。」

「何かあったの、橙輝君?」

由樹葉も心配して声をかける。

「いきなり、顔面になんかぶつかって来たんです。なんか心に心に...?して鋭いものが顔に乗りました。」

橙輝がさっきの事を説明する。

「ええ、いいなあー。俺も触り...」

唯人の声を遮り、ガンと鈍く重い音がした。

「唯人、危ない!!」

暗闇に慣れ始めた橙輝の目が薄っすらとだが、唯人の背後に迫る何かを捉える。

橙輝は考える前に走り出す。

無意識に唯人の身体を引き寄せる。

思い切り引き寄せた所為で唯人と橙輝は体勢を崩して尻餅をつく。

ガシャーンとガラスのようなものが割れる音が響く。

「...え？」

唯人は状況が飲み込めずにいたが、周辺の床を触れてガラス片に気付いた。

橙輝が自分を引っ張ってくれていなければ、下手すると死んでいた事に気が付いた。

死の恐怖がすぐ背後に迫っていた事で否応なしにドクンドクンと心臓が早鐘を打つ。

「.....はあ...あ.....いた、い...。」

唯人が胸を押さえて力無く橙輝に寄りかかって来た。

「！.....唯人、大丈夫だ。ゆっくり、ゆっくり、息を吸って...吐いて。」

橙輝は唯人を落ち着かせ、安定させようとする。

唯人はこくりと小さく頷く。

すうはあとゆっくりと呼吸をして行く。

何回も深呼吸を繰り返しているうちに苦しそうだった呼吸音も正常なものに戻って行った。

「ごめん、とーちゃん...。」

「楽になったか?...唯人が無事ならそれでいいから。」

橙輝は隣にいた唯人を優しく抱きしめる。

唯人は昔から身体が丈夫ではなく、持病持っていた。

運動はもちろん、いきなりガラスが落ちて来る等の驚きも心臓に負担をかけるような事は唯人の身体にはご法度だ。

「...良かった、唯人君が無事で。」

由樹葉は唯人の無事がわかり、ちょっぴり泣きそうな声だ。

「こうなったら、早く捕まえなき.....くそ、横通ったのに。」

藍が意気込んで直後、さっと何が通り過ぎた。

通った先には誰かいたか、記憶を辿る。

「黄輝！そっち行った！」

そちら側から黄輝の声が聞こえたのを思い出した。

「は、はい！」

黄輝は返事をして、耳を澄ませ辺りを注意深く見回す。

たたたたと近づいて来る音がする。

「.....そこかあ！」

黄輝がぱっと腕を広げて捕まえようとする。

「いたっ！」

白い物体を捕獲する事は出来ず、背中を踏み台にされた。

トンとテーブルの上に乗る音がした。

「今度はそっちか！」

黄輝は逃げられないように急いで立ち上がり、音を頼りに白い物体を追いかける。

黄輝と白い物体が追いかけてこをしている時に權は匂いと暗闇にまいて窓を探していた。

「...ふう、やっと見つけた。これで少しはマシになるだろうな。」

辺りに気をつけながらやっとの思いで窓際まで到着した權はぱっとカーテンを開け、窓を開ける。

「今度こそは.....って、眩しい！！」

黄輝が白い物体に手がかりそうだった瞬間、眼前が真っ白になる。

痛みともとれる光が注ぎ、黄輝は動きを止めてしまう。

だが、瞬時に思い出す。

皆が自分に期待している事を。

白い物体を任された事を。

黄輝は光に負けじと目を開く。

「待て！！！」

白い物体は光に向かい飛んでいた。

必死になって手を伸ばす。

だが、手は空を掴む。

もう少しのところで取り逃がしてしまった。

「.....あ.....。」

目に焼き付く、光に向かって行った白い物体の姿にまるで後光がさしたかのようで圧倒されて動きが止まる。

「.....待て、待てよ！！」

白い物体の姿はすでに無かった。

黄輝の声は虚しく響き渡った。

ぽんっと肩に手が置かれる。

「黄輝、もういいよ。」

「...藍先輩.....。」

労いの言葉をかける。

「黄輝君、怪我してない？大丈夫だった？」

「...由樹葉先輩.....。」

「まあ、頑張ったんじゃないか。」

「...權先輩.....。」

由樹葉も權も優しい言葉をかける。

「こーちゃん、かっこ良かった！」

一時はどうなることかと思ったが唯人も元気そうに駆け寄ってきた。

「...唯人先輩.....。」

「唯人、そんなはしゃぐなよ。」

橙輝もやってくる。

「……………」

「……………」

ふとした瞬間に橙輝と目が合う。

何を話していいかわからない。

気まずい時間が流れる。

「とーちゃん、なんかいいなよ！」

唯人が見かねて橙輝の脇腹を肘で突く。

「やめろよ、痛いな…！」

ほんの少し間を置いて橙輝が口を開く。

「…黄輝、よくやったな。」

たった一言だが、認められた気がして目頭が熱くなる。

「…う、う、俺…俺、つか、まえ…らんなかった…！」

我慢していたものが堰を切ったようように溢れてくる。

皆から貰った一言が、橙輝からの一言が、たった一言だが嬉しかった。

その後、黄輝は暫く泣き止む事が出来なかった。

「愛川先生、聞いているんですか！」

紫音は法蔵に捕まり、職員室に連行されて見張られながらの書類仕事に追われていた。

「茶常先生、煩いなあ...。」

紫音はぼんやりと呟く。

「心の声が漏れていますよ！！」

「え、本当?...ごめん。」

「そこで、謝らないで下さい！しかも、ちょっと本気なのが苛つきます！」

明るいブラウン色の髪に柔和な笑みを湛えた白いワイシャツの男性が近づいて来た。

「お取込み中失礼します。愛川先生、茶常先生をお借りします。...茶常先生、来週の会議の事でいいですか？」

あめだ
「飴田先生ですか。ええ、構いませんよ。」

あめだかんら
飴田甘羅は色彩高校の美術教師で美術部の顧問をしていた。

「愛川先生、ちゃんと仕事して下さいね！また、どこかに行かないで下さいよ！」

法蔵は甘羅と話をする間に紫音を見張れない為、大人しく仕事をするよう念を押す。

「わかってるって、まったく心配性なんだから...。」

「誰の所為だと思ってるんですか...！」

渋々といった様子で法蔵は甘羅と共に紫音から離れて行った。

コンコンと二回のノック音の後、ガチャリと職員室の扉が開く。

「失礼します。肌之先生はいらっしゃいますか？」

黒乃の声が職員室に響く。

「はい、いますけど。どうかされましたか、閻烙君。...それに、雪村君までどうしたんですか？」

紫音の向かいに座る、おっとりした優しい声の薄橙色の髪に四角の黒縁眼鏡をかけた男性、肌之露史は机から顔を上げる。

ぱたぱたと黒乃と真白は露史の元にやってきて、頭を下げる。

「折角用意してもらった課題ですが...このようにビリビリに破けてしまい、提出出来なくなりました。本当にすみませんでした。」

黒乃が真白の持っていた元課題の紙片を机に乗せる。

「黒乃は何も悪くないんです。全部俺が悪いんです。どんな事でも受け入れます。だから黒乃には...」

「真白、そういう事は言わない約束でしょう。真白は所為ではないんですから。」

真白と黒乃は互いに庇い合う。

「...どうして、こうなったのかはいまいちよくわかりません。雪村君はしっかり課題をやったのでしょうか？」

真白はこくと頷く。

「ならいいんです。提出して欲しくて課題を出した訳ではないですから、雪村君に授業内容を理解して欲しくて出したんですから。」

にっこりと微笑み、露史は真白と黒乃を快く許す。

「「ありがとうございます！」」

真白と黒乃はもう一度頭を下げた。

紫音は辺りを見回す。

(これって外に出るチャンスかも...?)

紫音はふと気づく。

この機会を逃すまいと早速行動に移す。

誰にも気付かれないように静かに席を立つ。

なるべく足音を立てないように、且つ扉まで迅速に移動する。

扉も静かに開けて静かに閉めれば、脱出成功だ。

(うーん、やっぱり職員室の外は気持ちいいね...。)

すたすたと廊下を歩き、職員室からなるべく距離を取る。

(折角だし、外出ようかな...。)

紫音は校舎の外になるべく人気のない場所へと向かった。

(...まあ、ここまで来れば大丈夫だよな。)

紫音は本校舎と体育館に繋がる通路の横にある水道の近く、本校舎の西角あたりにいた。白衣のポケットから食べかけの鮭とばを出した時だった。

紫音の周りだけが暗くなる。

(...ん？なんか、上から落ちてくる？)

頭上に気配を感じるが、そう思った時には時既に遅かった。

「いて。.....猫？」

紫音の頭に猫の足の裏らしき柔らかく鋭い感触が走った。

紫音が辺りを見回すと近くに不自然に丸い白猫がいた。

気になり猫に近づく。

すると、不自然な丸みの原因が判明した。

「ありりゃ、何これ...。胴体に布...いや、これってカーテンかな、ぐるぐる巻きになってる...。」

白猫の身体にはカーテンの布がぐるぐる巻きになっており、上にガムテープが貼られていた。

「可哀想に、ねえ...。今、とってあげるから...ちょっと大人しくしててね...？」

紫音はガムテープを剥がし、布をくるくると取って行く。

白猫は紫音の言う事が理解したのか大人しくしていた。

「...これでよし。.....そうだ、これをあげる。」

紫音は自分の食べていた鮭とばを一切れ白猫に差し出す。

すると白猫は嬉しそうに食べた。

「...美味しい？.....ふふ、そんなに擦り寄らなくても、もう一切れあげるよ。」

紫音はもう一切れ鮭とばを白猫に与える。

「...さてと、それじゃあ...もう行くね。ばいばい。」

すくっと立ち上がり、紫音は移動しようとする。

「...ついて来る気なの？」

歩く紫音の足元に白猫は付いて回る。

「別に連れてくつもらないんだけど...？」

紫音はしっしっと素っ気ない態度をとるが白猫は一向に離れる気配がない。

「.....いいよ、おいで。一緒に行こうか...。」

紫音の方が根負けし、諦める。

「まずは、使い物にならなくなったカーテンを捨てて.....虹研の部室に行こうか。...きっと可愛がってもらえるよ...？」

紫音は白猫共に少し離れた裏門近くのゴミ捨て場へと向かって行った。

「疲れたー！片付けて大変だね。」

唯人は腕を伸ばして伸びをする。

「いや、お前は片付けに参加してないだろ...。」

すかさず橙輝はツッコミを入れる。

「しょうがないじゃん。発作起きた直後にそんな事させられないって言ったの、とーちゃんでしょ？」

「まあ、それはそうだけどな...。」

「それに俺だって頑張ったんだよ？あの古代マヤ人が使ってたへんてこな壺直したんだからね！」

えっへんと自慢気に唯人は語る。

虹色研究部は白い物体を追う際にオカルト研究同好会の部室を荒らしてしまった。

白い物体を捉え損ねてひと段落した後、菖蒲からきつく叱られ部室の片付けを手伝って来たのだ。

「いや、唯人がそれ直してないから。」

藍もツッコミを入れる。

「唯人先輩がぐちゃぐちゃに接着剤でくっつけて新しい壺になったんですよ！」

黄輝が楽しそうに笑う。

「あの子の草津君、ものすごいショックを受けてたね...。確か、あの壺って結構いい値段で買ったみたいだし。」

由樹葉は苦笑いを浮かべる。

「...疲れたし、暫く寝るから...」

櫂がソファへと直行しようとした時だった。

「待って！」

由樹葉が櫂の腕を掴む。

「どうかしたのか？」

「制服についた匂いを消さないかね。」

由樹葉は部室に置いてある消臭スプレーを吹きかける。

「...悪いな。」

櫂はパーテーションの裏へと消えて行った。

「どういたしまして。...他のみんなもやろうね。」

由樹葉は他のメンバーにもシュッと吹きかけて自分にも行った。

「あの匂いの中に長時間いたから、鼻が麻痺して忘れてました。ありがとうございます、豊緑先輩。」

「いいよ橙輝君、そんな事でお礼なんて。...それよりも、大丈夫かな、匂い。」

由樹葉は尚も心配なようだ。

「全然平気だから、心配しなくてもいいと思う。」

「良かった...。藍君、ありがとう。」

大丈夫だとわかりほっとしたようだ。

「にしても、間に合って良かった…」

由樹葉が一息ついた時だった。

ガチャッと扉が開き、部室にまた新たな来訪者がやって来た。

「由樹葉ああー！会いたかったああー！」

新たな来訪者は入って来るなり、由樹葉に抱きつく。

「わっ！...紅葉くれは、部活お疲れ様。」

由樹葉は突進と思われる抱きつきをしっかりと受け止め、ぎゅっと抱き締め返す。

紅葉と呼ばれた鮮やかな赤髪で真紅の瞳をした男子生徒は秋風紅葉あきかぜくれはは由樹葉の弟である。

今は、家庭の事情で別々に暮らしている。

「寂しかったよ...。」

紅葉は由樹葉の肩に顔を埋める。

「うん、僕も会いたかったよ。」

紅葉の背中を優しく摩る。

由樹葉と紅葉は兄弟同士であるが愛し合っている。

そんな由樹葉と紅葉の周りには他者には踏み入れない領域が出来上がっていた。

「あきちゃん、今日は来るの早かったけど、どうかしたの？」

唯人は鉄壁の雰囲気^霧を諸共せず^ににずけずけと聞く。

「...お前、少しは考えろよ。由樹葉との時間邪魔すんな！」

ガルルッと威嚇せんばかりの勢いで紅葉は唯人を睨みつける。

「紅葉、そんな事言っちゃ駄目だよ。...明日試合があるから、今日は早く終わったんだよね？」

由樹葉は紅葉を宥める。

「うん！明日観に来て！」

紅葉はバスケットボール部に所属していた。

昔から運動は得意だったようで、一学期最初に色彩高校へ転校して直ぐにレギュラーになっていた。

「絶対に行くからね。」

由樹葉は紅葉の活躍が自分の事のように嬉しく思っており、毎回応援に行っている。

「試合、勝ったらさ...今度は一日俺のメイドさんになってよ。」

紅葉はそっと由樹葉の耳元で囁く。

「メ、メイド?!」

いきなりの事に由樹葉は驚く。

「.....変な話しないでくれますか？ここ部室なんで、部活中なんで。」

橙輝はこれ以上の暴走を止めるべく釘を刺す。

「ご、ごめんね！」

由樹葉は恥ずかしそうに顔を紅潮させる。

その時、またまたガチャッと扉が開いた。

「やあ、賑やかにしてるね...？」

「にゃあ。」

紫音が戻って来た。

「愛川先生、ちゃんと仕事して.....にゃあ？」

橙輝は紫音の声の後に聞こえた鳴き声に疑問を持つ。

「うわー！猫だ、可愛い！あいのん先生、触っていい？」

唯人は早速紫音の足元にいた白猫に駆け寄る。

「勝手にしていいよ。俺のじゃないしね...？」

「先生、どうしたんですか？」

黄輝は何故猫を連れているのか気になった。

「体育館に行くところにいたんだよね。妙に気に入られたみたいで...ついて来るんだよね...。」

紫音はやれやれといった様子だが、少しだけ嬉しそうにしているみたいだった。

「体育館は西側...白...鋭くてふにふに...そんなに大きくない...素早い...。」

藍はぶつぶつ呟く。

そして、全てが繋がった。

「白い物体はこの子で多分間違いない。」

藍は白猫へ指を指す。

「ええっ！ぞめさん、そうなの？」

白猫と戯れていた唯人は吃驚する。

「...オカルト研の下は丁度体育館に繋がる通路だし、俺が顔面に感じた感触にも合点が行く。」

橙輝は成る程と頷く。

「へー。こいつが白い物体の正体かぁ。まあ、猫なら色々悪戯もするか。」

唯人は興味深げに白猫を見つめる。

「でも、この猫丸くないですよ？俺が見た時はもっと丸かったです！」

「僕ももっと布っぽい感じじゃないかなって思うんだよね。」

黄輝と由樹葉はあれっと思いを傾げる。

「...あー、この子見つけた時カーテンぐるぐる巻きだったんだよね。...本当酷い事する奴もいたもんだよね、全く...。」

紫音の証言で全てに合点があった。

「今日の白い物体騒ぎはこれで解決だけど...何処から来たんだろう。」

藍は何故猫が高校に迷いこんだのか疑問に思う。

(何処からか、ねえ...なんか今朝職員室で言った気がするんだけど...何だったかな...?)

紫音は何かがあった事を思い出したが、何かを思い出すのはまだもう少し先の事である。

そして、紫音は思い出すのに気をとられ、こっそりと白衣のポケットから何かを引き抜かれている事に気付かなかった。

「撮影も大変だと思いますが...課題も頑張ってくださいね、姫城君。」

露史はふわふわの桃色髪で、大きな瞳に小顔で小柄な男子生徒、姫城桃太に紙束を渡す。

「...はい。」

うげっと言う顔をしつつも桃太は素直に紙束を受け取る。

「先生、見つかった？」

「見かけたと言う情報はありますが、捕まえていません。」

桃太の問いに露史は首を横に振る。

「そっか...。それじゃあ、撮影戻ります。失礼しました。」

桃太は一礼して職員室を出る。

(まだ、部活やってるかな...。会えるかな。)

桃太は、今日学校に来るつもりはなかった。

しかし、ドラマの撮影は難航しており、そして今現在、撮影は一時休止になってしまった。

撮影場所は色彩高校から近くにあることもあり、桃太は今まで欠席した授業の課題を貰いに来たのだ。

折角、学校まで来たから桃太には会いたい人物がいた。

桃太は想いを募らせ校舎の階段を上がって行った。

「よしよし、いい子だね...。」

紫音の膝の上で白猫は気持ち良さそうに丸まっていた。

「なんでなんすか!? 先生だけずるいです!」

「あいのん先生いいなあ。俺もやりたいー。」

黄輝と唯人はさっきまで白猫に懐いて貰おうと必死に格闘していたが、どうにも気難しい性格のようで全く駄目であった。

「.....。」

橙輝は白猫に熱烈な視線を送る

(可愛いなあ...。撫でたい...。)

橙輝はなるべく皆には恥ずかしいから内緒にしているが可愛いものが好きだった。

「唯人と黄輝は構い過ぎ。橙輝は遠くから眺めるだけじゃ駄目、アピールしなきゃ。」

藍はびしりと指摘する。

「構い過ぎて言ったてどうすればいいんだよー。」

唯人はむっとする。

「助けて下さい! 由樹葉先輩!!」

黄輝は由樹葉に助けを請う。

「うーん...。追いかけて過ぎないようにして、餌を与えたらどうかな?」

由樹葉は唯人と黄輝でも白猫が簡単に懐くような事を提案してみる。

「つな先輩にも懐いてたよね。いいなあ。」

唯人はぼやく。

「由樹葉に懐くのは当然だろ? 由樹葉は誰にでも優しいからな。...でも、絶対由樹葉は譲らないから!」

紅葉は誇らしげに自慢したかと思うと隣に座る由樹葉の肩を抱いて威嚇する。

「何時だって紅葉が一番だから、心配しなくてもいいよ?」

「由樹葉...!」

由樹葉と紅葉が見つめ合っていた時だった。

コンコンとノックする音が聞こえ、扉が開く。

「失礼します。」

桃太が入ってきた。

桃太の会いたい人は虹色研究部の一人である。

「あれ、今日休みじゃなかったけ？」

黄輝は桃太に驚く。

「撮影が今、休止になってんの。場所もここから近いし、顔を出したってわけ。それくらい分かれよ。」

はあと桃太はため息を吐く。

「相変わらず、仕事じゃない時は可愛くないどころか憎たらしいな。」

橙輝はぼやく。

桃太の世間での評判は見た目も中身も可愛い芸能界に舞い降りた天使である。

しかし、プライベートでは言いたい放題の我儘な性格である。

「僕のファンじゃないし、業界に関係するわけでもない奴まで相手にするの面倒なの。」

桃太はふんと鼻を鳴らして外方を向く。

「それよりも、權はいる？」

桃太の会いたい人物は權であった。

「向こうで寝てるよ。」

由樹葉はパーテーションの奥を指す。

「ありがと。」

桃太はすたすたと奥のソファに向かう。

權と桃太は幼馴染であった。

昔から二人は恋愛感情を互いが互いに持っていた。

しかし、二人共立場上の事を考えて想いを伝えられずにいた。

だが、先日やっと想いを伝え合う事が出来、晴れて付き合い出したのだ。

「權！」

ソファに横たわる權に呼びかける。

「もも。」

權は目を覚ましゆっくりと起き上がる。

「撮影終わったのか？」

「ううん、今休憩だから会いに来たんだ。」

「そっか。...こっち来て。」

權は手招きする。

「うん！」

桃太が權に近付いた瞬間だった。

權は桃太の腕を引っ張り、ソファに組み敷く。

「...權？まだ、撮影残ってるんだよ。それに他に人がいるよ。」

「暫く会ってなくて、もも不足なんだよ。」

權の顔が迫って来る。

「少しだけ。」

唇と唇が触れる手前の事だ。

「にゃあー。」

パーティーションの向こうから猫の鳴き声がした。

「この声...もしかしてタマ?」

桃太は閉じていた目を開く。

「猫...?」

權は桃太を仕方なく抱き起こし、皆にいる方へ向かう。

「やっぱりタマだ!」

紫音の膝に乗っている白猫を見るなり桃太は駆け寄る。

「...あっ、やっと思い出した。」

紫音ははっとなる。

「何をだ?」

權が凍り付くような視線を向ける。

尋ねる態度ではまるでなかった。

「テレビ局の人から電話あったらしくて、撮影で使う白猫が逃げたとかでみかけたら捕まえてくれって...言ってた。」

「今まで忘れてたって...結構大事な事だよな。つうか、姫城とられたからって不機嫌にならないで下さいよ、青世先輩。」

大切な事を忘れる紫音と猫に敵意剥き出しの權に橙輝はツッコミを入れる。

「やっと最後の撮影が出来る。タマも見つかったし、もう行かなきゃ。」

タマが逃げないように桃太はがっちり抱きかかえた時だった。

外から夕焼け小焼けが響いて来る。

「僕達もそろそろ帰ろうか。」

由樹葉は部活を終える事を提案する。

「そうですね!...今週ももう終わりっすね!」

黄輝は感慨に浸る。

「白い物体の正体もわかったし、今日は満足。」

藍も満足そうだ。

「さてと、タマの事伝えなくちゃ...ね。」

紫音はこれから職員室へ行くようだ。

「由樹葉、一緒に帰ろう!」

「うん。」

紅葉は満面の笑みを浮かべる。

由樹葉と一緒に下校するのが嬉しいみたいだ。

「もう撮影終わりなんだから。もも、今週は遊べるか?」

「日曜はお休み貰ってるから大丈夫だよ。」

權と桃太は早速の休日の予定を決めている。

「今日も何してたんだかな。」

橙輝は一日を振り返る。

「とーちゃん、いいじゃん。楽しかったし。...そりゃあ、周りからはなんてことない事だけど、それで一喜一憂するって青春って感じしない？」

唯人は楽しそうに橙輝に問う。

「...そうか？でも、平和に何事もなく一日が終わって良かったか。」

橙輝も自分なりに納得する。

「それじゃあ、片付けて帰りの支度をしたら解散しよう。今日も一日お疲れ様でした。」

由樹葉の一言で虹色研究部の部活動は終わりを迎えた。

ばさばさばさっと紙が散らばり、がちゃんと何かが落ちる音が生徒会室に響き渡る。

「これぐらいでいいだろう。俺達をコケにした事、後悔させてやる。」

「もうそろそろ行こうぜ、あいつが戻って来るって。」

二人の男子生徒は顔き合い、さっと生徒会室の扉から顔を覗かせ外を伺い誰もいない事を確認する。

「誰もいないな、行くか...。」

音を立てないように注意して生徒会室から男子生徒達は迅速に離れて行く。

「あいつが困り果てた顔が目浮かぶな。」

「ああ、そうだな。」

ニタニタと不快な笑みを浮かべ、男子生徒達は生徒会室荒らしを成功させたと思った。

その様子を荒らされた本人が見ていた事に気付かずに。

人気のない体育館裏で二人の男子生徒は語り合う。

「昨日、俺達が必死に作った京極を失脚させる為の計画書を作って渡したのにあいつの所為で東郷先輩に渡せなかったんだ...これくらいの報いを受けて当然だ！」

一人の男子生徒が体育館の壁を蹴る。

「ああ、そうだ！あいつを東郷先輩の側から引っぺがしてやる！」

もう一人の男子生徒もふんと仰け反る。

「あの白猫も今頃苦労してるだろうな。折角...東郷先輩に計画書を渡そうとしたのにびりびりに破きやがって！どいつもこいつも刃向かったらどうなるか教えてやる！！」

昨日の出来事を思い出してか男子生徒は語尾を強める。

「今日の白い物体騒ぎ...いや、白猫をカーテンでぐるぐる巻きにしたのは本当は俺たちがやった事だけどあいつ...^{くろがね}鐵の所為にすれば、先輩からの信頼も失墜させられる！」

あははと二人の男子生徒は高笑いをする。

彼らの気分が有頂天になっていたその時、ピコンと三日天下終了の音がした。

「私の事を呼んだか？」

二人の男子生徒の前に一人の赤茶髪で冷たい眼光を放つ男子生徒が現れる。

男子生徒達が追い落としたいと願ったターゲット、^{くろがねさびと}鐵鑄斗である。

三年B組所属で幼少の頃から銀河の側で補佐や身の回りの事を世話していおり、現在は自身も生徒会で庶務を務めている。

「な、なんで...お前がここにいるんだ！！」

一人の男子生徒は標的を目の前に激昂する。

「う、嘘だろ？全部ばれたのか...！」

もう一人の男子生徒は今後の行く末を案じ狼狽える。

「生徒会室から出てきた後を付けていた。貴様らのやった事は大体把握した。」

鑄斗は怒るでもなくいつもの通りの冷静な口調で淡々と告げる。

「...っ把握したからなんだ！こっちは二人いるんだ！お前の言う事なんて誰も聞きやしないんだよ！！」

男子生徒は大声で怒鳴る。

「...そうだ！俺達がやった証拠はどこにあるんだよ！」

もう一人の男子生徒も勢いに乗って反論する。

鑄斗はすっとスマートフォンの画面を見せ、撮影した写真の項目からある一つの動画のアイコンを押す。

『今日の白い物体騒ぎ...いや、白猫をカーテンでぐるぐる巻きにしたの本当は俺らがしてやった事だけどあいつ...鐵の所為にすれば、先輩からの信頼も失墜させられる！』

画面には男子生徒達のさっきの姿が映し出された。

さあっと男子生徒達の顔色が青ざめて行く。

「これが証拠だ。これを見せれば貴様らはなんらかの処罰を食らうだろう。」

鑄斗はさっとスマートフォンをポケットにしまい、冷酷な視線を男子生徒達にくれる。

「……ふざけんなあ！」

追い詰められ男子生徒の一人が鎬斗に殴りかかる。

しかし、鎬斗は片手で男子生徒の拳パシッといても簡単に受け止める。

「甘いな。」

もう片方の手で男子生徒の腕を掴み、流れるように背負い投げを決める。

「ぐあ！」

ずだんと男子生徒は背中から落ち、痛みから起き上がることが出来ない。

「まったく…手間取らせてくれたな。時間が無駄になった。」

起き上がることも出来ない男子生徒を冷やかに見つめる。

「お願いだ、なんでもするから…助けてくれ！許してくれ！」

もう一人の男子生徒は鎬斗の制服の端を掴んで縋る。

「色彩高校から去れ。お前らのような存在は銀河様の霸道には目障りだ。」

鎬斗は助けを請う男子生徒を無慈悲に突き飛ばす。

踵を返し、鎬斗は本校舎へと戻っていった。

「お願いだ！許してくれ！」

男子生徒の願いは虚しく体育館裏に木霊した。

そして翌日から二人の男子生徒を見たものは誰もいなかったという。

男子生徒達の悪行を白日の下に晒した後、鎗斗は生徒会室に戻っていた最中であつた。遠くには鎗斗が人生を賭して尽くしている人物の姿が確認出来た。

「銀河様！」

鎗斗の声が届いたのか、銀河は振り返り立ち止まる。

廊下を走らないよう早歩きをして銀河の元に馳せ参じる。

「...鎗斗か。そういえば...先程まで見かけなかったがどうかしたのか？」

銀河はがっしりとした高身長で廊下の窓から射す光を受けて輝く銀色の短髪、威圧的で見る者を惹き付ける佇まいが特徴的である。

「少々、雑務を片付けていました。銀河様はもう今日の仕事は終えられたのですか？」

鎗斗は先程の男子生徒達への冷ややかな態度とは一変し、柔らかな表情を浮かべていた。

「ああ。もうお前も終わったのだろうか？」

「はい。」

「では、帰り支度を頼む。」

鎗斗はいつものようにスマートフォンを取り出し、銀河の家の使用人に帰りの車を手配するよう命じる。

「準備は整いました。さあ、帰りましょう。」

何事も変わらずに一週間自分の役目を全うした銀河と鎗斗は正門へと向かい夕暮れで赤く染まる色彩高校を後にした。

まだまだ部活動したりない！

「やっと終わった...。」

紫音は机の上に突っ伏す。

「後から残ってやるのはいい加減やめたらどうですか？」

法蔵はやれやれといった様子で紫音を見つめる。

「...ほうちゃんが居なかったら月曜日にやったのに。」

紫音はむすっとする。

「仕事中にその呼び方はやめて下さいと何度言ったらわかるんですか?...ていうか月曜日じゃ遅いんですよ！！」

法蔵と紫音は高校時代からの腐れ縁で共に色彩高校の卒業生である。

「俺達以外誰も居ないから、いいじゃん...ね。」

職員室の時計は八時を指していた。

金曜日の為か、残業する教師は紫音と法蔵以外には居なかった。

「誰も居なくなる前に仕事を片付けて下さいよ、まったく！...無駄口叩いてないで、早く帰りますよ！」

法蔵は紫音を急かす。

「...はいはい。」

重い腰を上げ、紫音は帰り支度を始めた。

始めたはいいが紫音はある異変に気付く。

「あれ...？車の鍵どこ...？」

紫音は通勤に自動車を使っていた。

いつも白衣のポケットに入れていたがいくら探してもなかった。

「...全く、身から出た錆ですね。きちんとしなさい、といつもあれ程言っているのに。」

紫音のだらしなさに法蔵は呆れてしまう。

「うーん...。何処で落としたのかな...？」

紫音には落とした記憶も落としそうな事をした記憶もない。

「ほうちゃん、先帰っていいよ。ちゃんと戸締りしとくから。」

職員室には見当たらない。

他の場所で落としたのだろう。

時間がかかりそうなので、法蔵に待っていなくていい旨を伝える。

「そうですか。では、お先に失礼します。」

法蔵は後の戸締りを紫音に任せ職員室を出て帰宅する。

(とりあえず...今日行った場所を探すかな...。)

紫音は自動車の鍵を探しにしんと静まり返った校舎を探しに行った。

(...やばいかも。何処にもなかった...。)

虹色研究部の部室、保健室、今日授業をしに行った教室と思当たる節を回り尽くした。
後は、裏門の駐車場だけだ。

(まさか、車の近くで落としたなんてオチかな...?)

紫音は見当たらない鍵にある不安を募らせていた。

自身の車の回りを探す。

しかし、鍵どころか何も落ちてはいなかった。

(いよいよ、盗難の覚悟をしないと駄目かな...。)

紫音は決心して車のドアに手をかける。

(.....。開いてる...?)

今朝しっかりと閉めたはずなのに。

まさかと思い切ってバツと開く。

紫音は目に入ってきた光景に驚き、思わず扉を閉めた。

(...何だったんだ、今の...夢?)

助手席に頭に猫耳をつけメイド服を着た藍が寝ていた。

非現実的な光景を紫音は信じられるはずもない。

(俺、疲れてるし...。きっと幻覚か何かだね...うん。)

突っ立っては何も解決しない。

とりあえず、もう一回ドアを開く。

「...ん。おかえり、紫音。」

瞼を擦りながら、藍は紫音に呼びかける。

「何してんの...？」

夢じゃなかった。

藍は目の前にいる。

「紫音の事待ってた。」

藍は至って真顔で答える。

「いや、だから、何で待ってんの...？」

紫音には不明な点がありすぎる。

訳がわからなかった。

「とりあえず突っ立ってないで、車の中に入ら？...この状況見られたら、紫音やばいんじゃないの？」

藍の言う通りだ。

教師の車内にメイド服を着た生徒がいる、この状況を見られたら紫音は解雇されるに違いない。

それどころか、明日のテレビや新聞を賑わせてしまう。

他に誰もいない事を確認して、素早く車に乗り込んだ。

「紫音の事、待ち伏せしたんだ。最近構ってくれないから。」

藍は運転席に座った紫音の上に跨る。

「...まあ、最近は大忙しだったし...。」

紫音は藍の気迫に押し負け始める。

紫音と藍は教師と生徒の間柄であるが周囲には内緒で付き合っていた。

「...さっきはタマばかり。懐かれたのがそんなに嬉しかったの？」

紫音は部活中に迷い猫にと出会い、懐かれていた。

「猫に嫉妬かな...？」

「嫉妬しちゃ...悪い？」

どンドンと距離が狭くなっていき、ゼロ距離の抱き着く形になった。

藍の真っ直ぐに求めてくる言葉が、ゼロ距離から伝わる体温が、紫音を駆り立てる。

(こんなとこ誰かに見られたら即アウトなのに...俺って、やっぱ教師失格なのかな...。)

自然と紫音は跨る藍を見上げるように近づき、藍は顔を下げる。

「.....んっ。.....あ.....んん。」

舌と舌を絡め合う深い口付け。

歯列を上顎を、口内を貪る。

藍は気持ちいいのか腰を揺らす。

「.....ぷはっ。」

長く口付けていた所為か、唇を離すとどちらのものかわからない白い糸が繋がっていた。

「...腰揺らちゃって、そんなに良かったのかな...？」

するりとひと撫でて、紫音はつい悪戯っぽく聞く。

「...うん、気持ちいい。...ねえ、もっと...しょ？」

藍は恍惚とした表情で強請る。

「本当、藍は誘うの上手いよね...？もう、抑えないけど...いい？」

こうも求められると抑えられない。

「抑えなくて...いいよ。.....ねえ、紫音...中どうなってるか気になってるんじゃない？」

藍は紫音の手をひらひらの膝丈スカートの中へ誘導する。

紫音は誘われるがままに中に手を入れる。

「.....ふーん。男物ではなさそう...だね。」

太腿に手を這わせる。

「...さてと、どうなっているのか答え合わせと...」

中心部分に行こうとした時だった。

きゅううと切ない腹の音が車内に響く。

「...ごめん、続けて。」

何食わぬ顔で藍は先を促す。

「...完全に削がれたって。」

紫音の熱は完全に冷めてしまった。

「あれから、何にも食べてないみたい...だね。」

はあと溜息をついて、藍を助手席に戻す。

「部活終わった後に、これ取りに行ったから忙しくて食べてない。」

藍はスカートの手をもち上げる。

「何か食べたい物でもある？」

「シェフのお任せで。」

「手作りならなんでもいって訳...ね。」

ふうと溜息を吐いて紫音はエンジンをかける。

「親御さんに連絡は済ませた...？」

「うん。ちゃんと明日帰るって言ってある。」

「...そこらへん、ちゃっかりしてるね...まったく。」

藍の用意周到さには困ったところか、最近では尊敬さえし始めて来た。

紫音はアクセスを踏み、藍を乗せ自宅へと向かって行った。

「...ねえ、メイド服しか持っていないわけ...？」

色彩高校から車で一時間程、今夜はスーパーマーケットで晩御飯を買ったから、もう少しかかったが紫音の自宅に到着した。

自宅は十五階建てのマンションの十階である。

今、藍と紫音は地下の駐車場にいた。

「一応着替えはあるよ。」

藍は後部座席を指差す。

「...なんだ。さっさと着替えて。」

お互いに了承しているとはいえ、高校生である藍がメイド服で成人である紫音と共に歩いていたらどうだろうか。

きっとすれ違う近隣住民達は不審がるだろう。

明日からマンション中に噂という形で誤解が広がるに違いない。

「別に大丈夫でしょ。ほんの少しだし。面倒だし。」

藍はそのまま車から降りる。

「いやいや、それ、絶対フラグだから。隣の人とすれ違うって。」

紫音は慌てて車内に連れ戻そうとするが後の祭りだった。

藍はすたすたと歩いてしまっていた。

「早くしなよ。」

くるりと振り返り、遠くから藍は急かす。

「.....あー、わかったから...ちょっと待った。」

紫音は観念して車内から荷物を取り出し、鍵を閉めて慌てて藍を追いかける。

「紫音、間に合って良かったね。」

藍はエレベーターの前でボタンを押して待っていたようだ。

チンと到着の音が鳴る。

「はあ...はあ...、危なかった。」

紫音は全速力で走って来た為、息が上がっていた。

「紫音って、案外こういうところはおじさんだよな。」

「おじさん言うな。まだ二十代なんだけど...？」

高校生に笑われるのは流石に腹が立つ。

自分からは自虐的に年齢をネタにするのだが、他人特に年下からネタにされるのは癪に障る。

ドアがしまり、エレベーターは上に向かっていく。

そう思われた時だった。

スピードが落ちて止まるのがわかった。

エレベーターは一階を指し、扉を開く。

(.....ちょっと、本当に鉢合わせか....。)

紫音の内心はとても焦っていた。

「愛川さん。こんばんは、今ご帰宅ですか？」

中肉中背の紺スーツの男性が乗って来た。

「...ええ、まあ。」

よりによって、乗って来たのは隣の住人であった。

三人を乗せ、エレベーターはまた上昇を始める。

「紫音、この人は？」

余計な事に藍が口を開く。

事態は悪化しどんどん紫音は追い詰められて行く。

「田中といいます。...貴方は？」

明らかに不審な目を向ける。

誰だって猫耳をつけメイド服を着た未成年の男子がエレベーターに乗ってたら気になるに決まってる。

「染田です。紫音の恋人してます。」

藍の一言で紫音にトドメが刺された。

「？」

田中は状況を飲み込めずに困惑し声を出せない。

紫音は頭が真っ白になり、エレベーター内に数秒の静寂が訪れた。

チンと音がなり、目的の十階に到着する。

外に出て、廊下を数メートル歩く。

「...私は、お互いにそれでいいのならいいと思いますよ。」

田中はそう言い残し、自宅に入って行った。

紫音は明日からの不安で頭が真っ白になった。

「紫音、何やってんの？入ったら？」

藍はいつの間にか合鍵を使って自宅のドアを開けていた。

「...え、ああ、そうだった...ね。」

現実逃避していた意識が戻り、紫音も自宅に入った。

パタンと鍵を閉め、靴を脱ぐ。

紫音の自宅は全体的に物が少なくシンプルで小ざっぱりとしている。

廊下を真っ直ぐに歩き、キッチンダイニングリビングのある方へと向かう。

「...メイドなんだから、ソファに座ってないで手伝ってよ...？」

紫音は晩御飯の準備をし始める。

「うん、で何するの...ご主人様？」

「まずは...テーブル拭いて。」

藍はまるで何処に何があるのかをわかっているかのように動きに無駄がない。

「...なんで、さっき恋人って名乗っちゃったわけ...？下手したら明日から俺、犯罪者扱いだよ...？」

ようやくショックから立ち直って理由を聞く事が出来た。

「紫音を取られたら困るから、きっちり主張しとかないと。」

藍は至って真面目に答える。

「...俺は大丈夫だから。それより、俺以外の前でそんな姿を晒した自分の心配してくれないかな...？」

藍が紫音の事を考えてくれる事は紫音にとっては心地よいものだが、紫音は藍に自身の事を心配して欲しい。

「...そうだった。もうこの格好で外歩かない。」

「そうしてくれると助かる...かな。」

傍目から見たら淡々としたやり取りに見えるかもしれない。

だが、紫音はこの方がいいのだ。

お互いに分かり合っているから出来る事だ。

今までの女性達とはこうはなれなかった。

紫音に近づいて来るのは大体、遊びや短い間だけの関係を求めて来る者であった。

「拭き終わった。次はお皿出すね。」

「オッケー.....うん、よろしく。」

紫音には本気でいてくれる藍は掛け替えの無い存在になっていたのだ。

「ご馳走様でした。」

藍はスプーンを空になった皿の上に置く。

「ふふ、今日の出来はどうだった...かな？」

紫音は少し上機嫌な様子でグラスに口を付ける。

「うん、美味しかった。」

今晚、紫音が作ったのはパエリアであった。

テーブルの中心には鍋があり、小皿に取り分けて食べていた。

加えて、海老のアヒージョと生ハムのサラダまで作っていた。

「...でしょ？即席にしちゃ、よく出来た方、かな。ワインにも合うし...。」

紫音は酒の次に料理が好きであった。

最初はより酒を美味しく飲む為に拘り始めたのがきっかけだった。

「...さてと、ご飯も食べたし...。さっきの続きをしないと、ね...。」

紫音は車内での続きが気になって仕方がなかった。

「うん。いつでも大丈夫。」

藍はかたりと立ち上がる。

「っと、その前に...洗い物しないと。その間に、お風呂入っておいで。」

紫音はテーブルの上の皿をまとめてシンクに運んでいく。

「...それって仕返し？」

藍は意気込んでた分、肩透かしを食らった気分だ。

「うーん、どうだろう...ね？」

なんだか得意げな紫音に藍は少し腹が立った。

「.....別にどっちでもいいけど。とりあえず入って来る。」

藍は浴室へと向かって行った。

「...さてと、準備万端だね...。」

ガチャリとバスローブを身に纏った紫音は寢室のドアを開ける。

寢室はシングルサイズのベッドとクローゼット等の収納が置かれたさっぱりした部屋であった。

「早く...しよ？」

藍はベッドの縁に腰掛けている。

待ちわびたと言わんばかりに隣に座れと手をとんとんと叩く。

「ふふ、血の気が多いんだから...。そんなに焦らなくても、夜は長いんだから大丈夫だよ...？」

紫音は藍の隣に腰掛ける。

「さてと、部活動第二部...とでもいきますか。.....一応聞いとくけど、中はあのまんまだよね...？」

「うん。...早く確認して？」

熱っぽく求めて来る視線に収まっていた衝動が再び蘇る。

「答え合わせ...再開。」

可愛らしいフリルの付いたスカートの中に手を入れる。

「.....あっ、ん.....。」

藍はびくっと身体を震わせる。

「軽く撫でただけ...だよ？そなんじゃ、今晚は大変かもよ...？」

意地悪く耳元でそっと囁く。

「答え...分かっちゃたけど、一応目でも...確かめておこうかな...。」

紫音は入っていた手を出し、スカートをぱっと捲りあげる。

「本当、こんな状態で外歩いてたなんて...ね。」

藍の白くて細い太腿、熱を持ち上向き始めた藍自身が露わになる。

「...答えは何にもつけてない、だね。」

紫音はじっくりと視線を藍のものに這わせる。

「...そうだね、一回イッておこうか...？」

「紫音...気持ちよくして？」

「...相変わらず、可愛い顔しちゃって...。いいよ、よくしてあげる。」

紫音は硬くなり始めたそれを手を上下に動かし擦る。

時に先端の蜜口を執拗に弄りながら。

「.....あ、いい.....んあ.....。」

藍の口から甘い喘ぎが漏れる。

「...なんだか、大分...えっちな感じになっちゃった...ね？」

スカートは怒張した藍自身の部分が盛り上がり、黒い布地にはシミが広がっていた。

「...紫音は.....こういう、の...好き？」

藍は潤んだ瞳で紫音を見つめる。

「うーん...偶にはコスプレも盛り上がっていい、かな？まあ、藍が演じて無さ過ぎなのは...あれだけど。」

ふふっと楽しそうに紫音は答える。

「...もっと、メイドっぽく.....すれば満足？」

「まあ、そうかな...。...さ、お喋りはこれ位にして.....イかせてあげる。」

紫音は止めていた手を動かす。

先刻以上に激しく擦る。

「あ、ああ.....すご、もう.....いっちゃ.....んあっっ！！」

藍はびくびくと身体を震わせる。

紫音の手には勢いよく白濁が出された。

「...気持ち良さそうにしちゃって...。」

快樂の余韻に浸る藍を見つめる。

「…………ご主人様、何をすればいい？」

藍は熱い視線を紫音に送る。

「ちょっと、さっきの間に受けたわけ…？」

焦る。

藍はいつも積極的である。

それだけでも、いつも抑えが利かなくなる。

なのに、ご主人様などと呼ばれては理性を保てない。

「…ご主人様はその方がいいでしょ？……好きなようにしてよ。」

藍はバスローブの紐を解き、前をはだけさせる。

「…後でやめてって言っても、俺が満足するまで…やめてあげないけど？」

紫音は藍の手を掴む。

だが、表情は瞳は欲望に染まって藍を求めている。

「ご主人様が思ってるほどやわじゃないから。思う存分して…？」

紫音の熱望に蕩けた表情で藍は求める。

もう此処までされたらどうしようない。

「なら…俺のを、勃たせてくれない…？」

紫音はだらりと下がっている自身を指差す。

「…うん。」

こくりと頷き、藍はベッドから立ち上がり紫音の前に跪く。

紫音のものに顔を近づけ、ぺろぺろと舐める。

「……うん、結構……良い感じ……だね。」

漏れる吐息にざらりと、しかし柔らかく温かな感触で自身が張り詰めていくのを紫音は感じていた。

藍のメイド服での奉仕という光景が更に紫音の欲望を掻き立てる。

「……んん、……はあ……んっ。」

藍は紫音のものを口に含み、頭を動かす。

藍の一生懸命な行為に紫音はどんと膨張していく。

「……はい、そこまで。……よく、出来ました…。」

危うく藍の口に出してしまいそうになほどに気持ち良かった。

藍の顔を自身から離してやる。

紫音は優しく頭を撫でる。

「……………」

藍は紫音のそそり立つものを見つめている。

「…何？まだ、しゃぶってたかった？……そうだね、今度は下の口でしゃぶって。」

藍を立たせてひょいとお姫様だったをする。

「わかった。じゃあ、なかで出して。紫音の欲しい。」

藍をベッドに横たえさせる。

「それじゃあ、足…開いて。」

すっと開脚され、藍の大切な部分が白日の下に曝される。

閉じられないように紫音は体を脚の間に入れる。

「…もう、こんなになって……本当、若いってすごい…ね。」

さっき果てたばかりだということにもう天井を向いていた。

「だって、これから紫音と繋がれるんだもん…。」

藍は蕩けた表情をしている。

「…本当に、もう…。そんなことばかり言って…後でどうなっても…知らないから、ね。」

紫音は人差し指を力を入れて藍のなかに侵入する。

「……………あ、そこ……すき…あんっ。」

藍の寝室に甘い声が漏れる。

紫音は指を蠢かせ、藍の感じる場所を責める。

「…もうそろそろ、増やそう…かな。」

中指も侵入させて、更に藍のなかを掻き回す。

「…あ、だめ……これ、いじょう…は……あ、くる。」

藍は快感にまかせて腰からせり上がってくる熱を解放してしまおうとした時だった。

「おっと…。まだ駄目、だよ。…一緒にイクんだから。」

紫音は張り詰めていたものの根本をぎゅっと握る。

「……うう……。」

藍は解放を阻まれて顔を歪める。

「…まあ、この位でいい…かな？」

紫音は指を引き抜く。

「…それじゃあ、挿れる…ね。」

熱く昂ぶった紫音自身を藍に押し付けぐっと力を込める。

ずぶずぶと紫音は藍のなかに入っていく。

「ああっ…しのん、のが……やあ…。」

藍は恍惚とした表情で甘い声を漏らす。

「……はあ、相変わらず……凄い締め付け…。でも、いつもよりも…きついかも…。我慢させてる…せい、かな？」

紫音のものは藍のなかに全て入り、紫音は腰を動かす。

「あっ、そんなに…こすっ、たら……あん、そこ、は……あああ…。」

藍の感じる場所を執拗に責め立てる。

「……俺も、そろそろ…イきそう…。今まで我慢させて…ごめんね。一緒にイこう、か。」

紫音は今まで藍を縛っていた手を離し、更に激しく腰を動かす。

「ああ、すごい…のくる……あああっっー！！！」

「っー——！！」

紫音は藍のなかに熱い白濁を迸らせる。

「……………はぁ…良かった、かな。」

紫音は余韻に浸り微笑む。

「……………ん、すごかった。」

藍も幸せそうに微笑する。

「…でも、まだしたりない…ね。さあ、もう一回しよう…か。」

紫音の瞳からはまだ欲望の色は消えていない。

まだまだ、繋がっていたかった。

「して。まだ足りない、もっとちょうだい。」

藍も強請る。

普段は生徒と教師の間柄だ。

大っぴらに一緒にいることなど出来ない。

その所為か互いが互いを求める。

一緒にいられない時間を埋めるように。

「さあ、夜はまだまだ…これから。楽しもうか…。」

紫音と藍はこれから日が昇るまでに何度も繰り返し求め合っていった。

作中に出てきた虹の画像

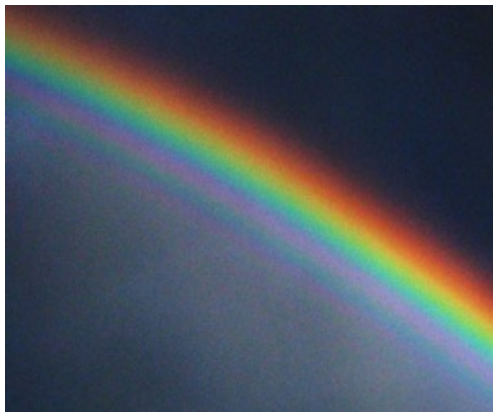
1 白虹



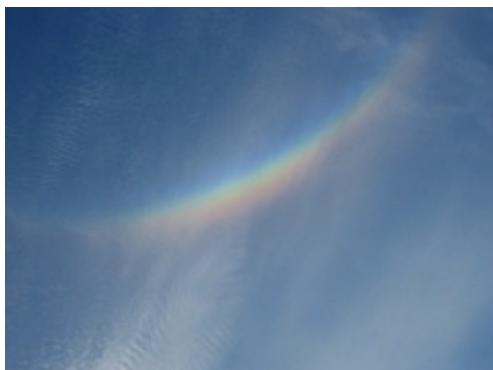
2 丸い虹



3 過剰虹



4 逆さ虹



後書き

こんにちは！

前回の『僕らは今日も幸せです』からかなり間があきました。

すいませんでした。

(読んでいない方は是非検索して読んで頂けたらと思います。)

虹研メンバー見たいと言われて書いてみたストーリーですが...すごく当初よりボリュームが増えました！

キャラクターも沢山出てきましたね！

出てただけで何人いるんでしょうか？

(数えてみてはいかがでしょう？)

名前だけの子も入れるともっと増えますね(笑)

皆さんの推し&推しCPは誰ですかね？

なんて気がはやいですかね。

私はもちろん色彩高校箱推しです！

Twitterでは一番早く公開

『確執は暗く深く』はpixivとここだけのオマケで

おまけの画像はここだけのオマケ

となっています！

今回のストーリーの時期は本編の真ん中位でしょう。

これまでに起こったであろう出来事とこれから起こるであろう出来事を是非想像してみたりしていただくのもいいんじゃないでしょうか。

『いろいろ』世界の広がりを楽しんでいただけたらと思います！

今回のCPは紫音と藍でした！

部活動中はたいして関わりがなかったのでびっくりしたのではと思います。

他の子達かなとか思わせ振りの部分もありましたし。

こちらもボリュームミーになりました。

アツアツな2人のラブシーンを楽しんで頂けたでしょうか？

この物語はフィクションです。

実際の団体・事件には一切の関わりはございません。

ここまで読むの本当にお疲れ様でした。

感想等ありましたらお気軽にどうぞ！

楽しんで頂けたら幸いです！

ありがとうございました！

部活動だよ！全員集合 ～ 『いろいろ』 虹色研究部の活動日～

<http://p.booklog.jp/book/109211>

著者：163

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/himegoto163/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109211>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109211>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ